雅俗
重

やまこうた八人のおとこ紙をとりて
これをこそあまたりけれ毎年あり人にあ
まきたりけるものあれど心にまかせな
ものこころのあつまりたるなり
こころたくらひかりのもしかりの
ものこころけつきていろいろのものの
さはこまりかりもつれとして
あつまりふるおほ紙をと

あさか山のことははうねめのたはふれよりよみて

かつらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるにくにのつかさ
ことおろそかなりとてまうけなとしたりけれとすさま
しかりけれはうねめなりける女のかはらけとり
てよめるなりこれにそおほきみの心とけにける

このふたうたはうたのちゝはゝのやうにてそてならふ人の
はしめにもしけるそもそもうたのさまむつなり
からのうたにもかくそあるへきそのむくさの
ひとつにはそへうたおほさゝきのみかとをそへた
てまつれるうた

なにはつにさくやこのはなふゆこもり
いまははるへとさくやこのはな
といへるなるへし

ふたつにはかそへうた
さくはなにおもひつく身のあちきなさ
身にいたつきのいるもしらすて

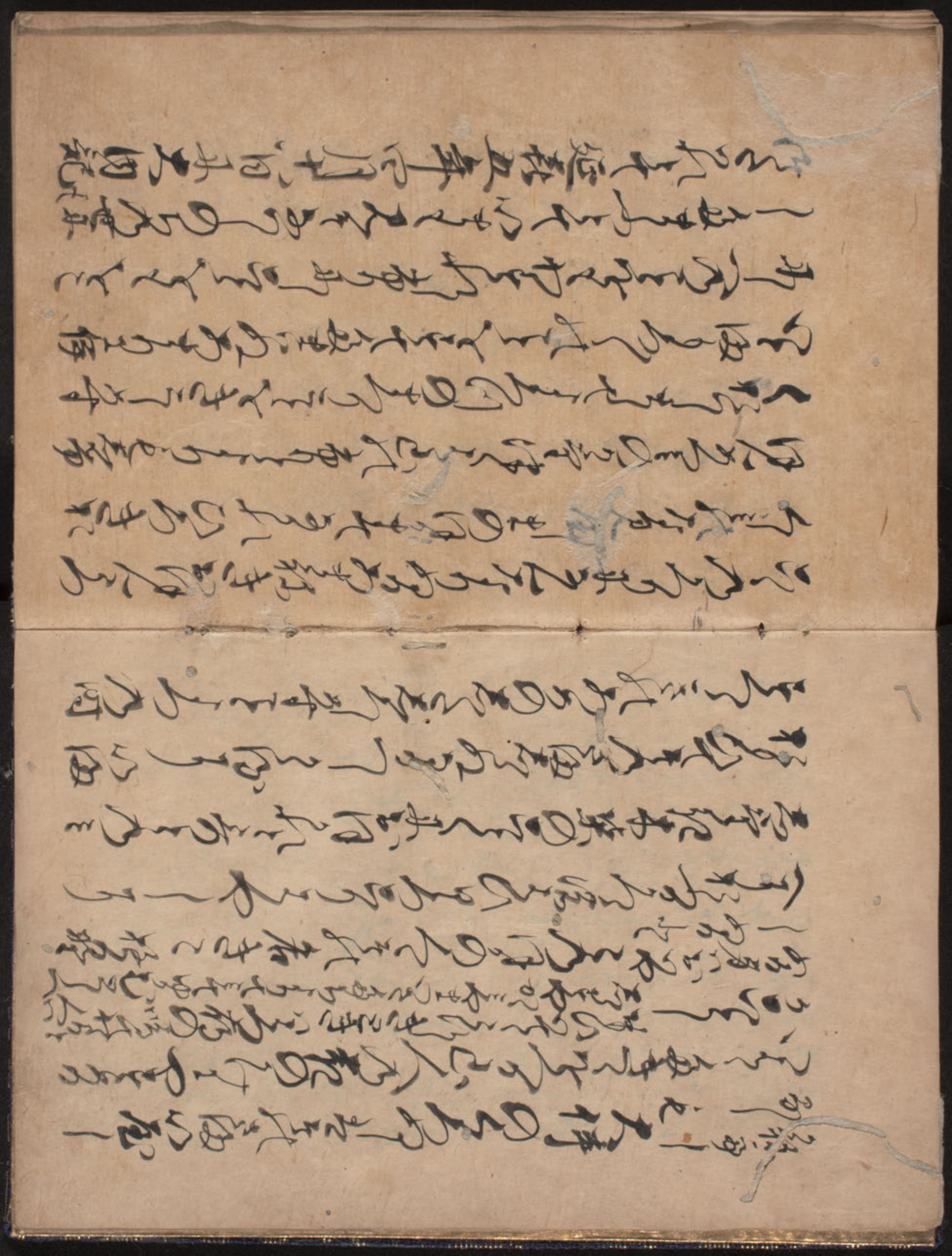
これはたゝことにいひてものにたとへなともせぬものなり
このうたいかにいへるにかあらむそのこゝろえかたし
いつゝにたゝことうたといへるなむこれにはかなふへき

みつにはなすらへうた
きみにけさあしたの霜のおきていなは

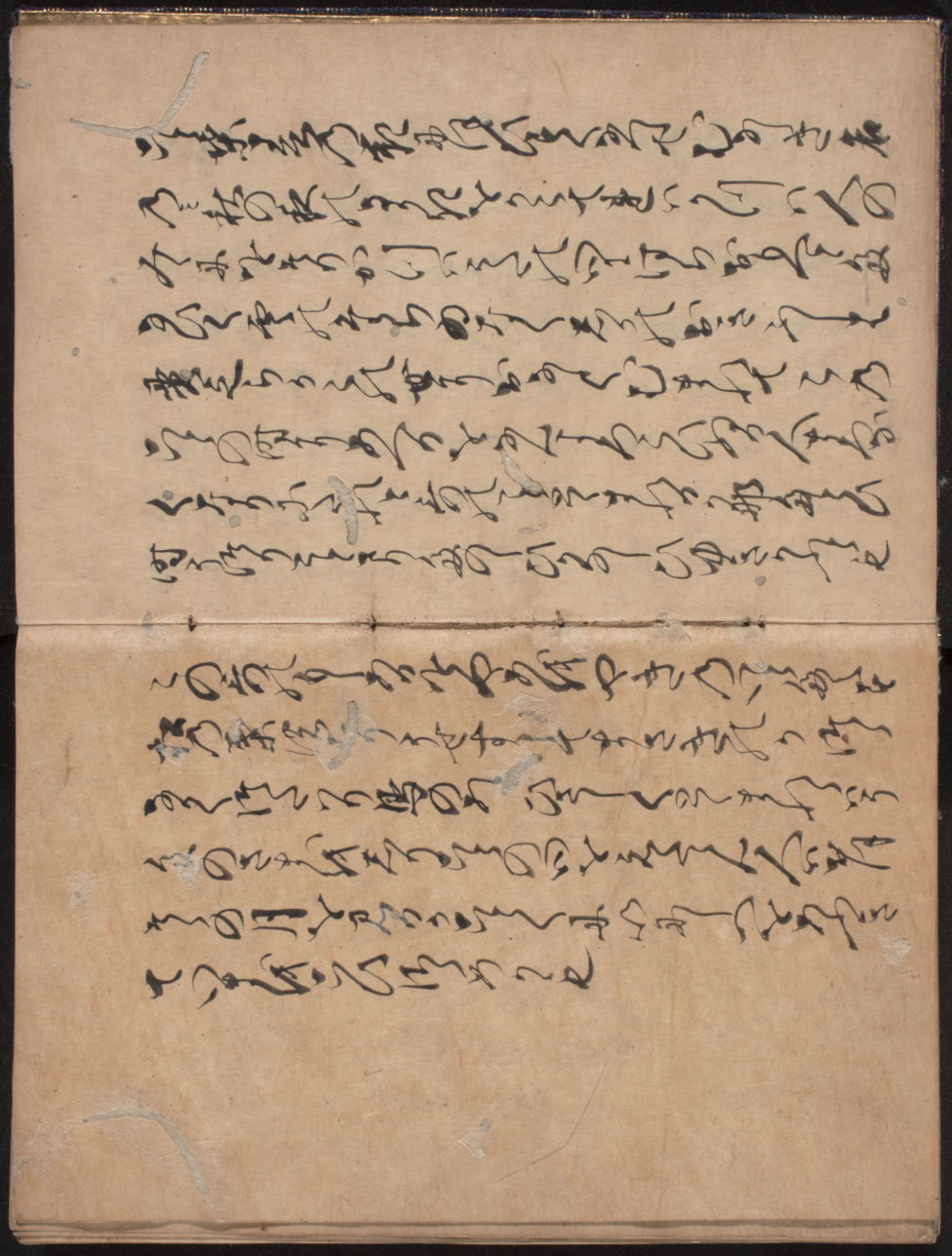
さしてよききこえやまさるらむといふなりけり
これはものゝなをきゝて[illegible]やまみなみむかしの[illegible]
このことくなりとて[illegible]ことをはちめれは[illegible]
ふせくのかりのてまのおほすて
やなりやこれはいふらんへりけむ
もろこしのいしもとはさしもまつは[illegible]
よみいたくさ
まさこはよみはくもとこもとつるまりて
これはもろ[illegible]のうちもの[illegible]
[illegible]
このことや[illegible]
[illegible]

いほりのすみかせありせいつけるも
の[illegible]れかまちしとつかすり
これは[illegible]
[illegible]
むかしあはいかなひとさ
この[illegible]いむかへもみえ[illegible]
よりえありこれはなりせりとつかなるてり
[illegible]
[illegible]

世中をうきものとおもひしりにしかとも
なほうきことのみおほくてのがれいでぬるは
人のこころなりけりとぞおもひ侍る
人のこころのうつりやすきはあきのつゆにぞ
なほまさりける
あきのつゆはいろかはりやすしとはいへども
なほもとのみどりにもとまりてはかりにくるあきの
ものをもとめてはかりにくるあきのつゆ
なほもとのみどりにもとまりてはかりにくるあきの
つゆ
あきのつゆはいろかはりやすしとはいへども
なほもとのみどりにもとまりてはかりにくるあきの
つゆ
あきのつゆはいろかはりやすしとはいへども
なほもとのみどりにもとまりてはかりにくるあきの
つゆ
あきのつゆはいろかはりやすしとはいへども
なほもとのみどりにもとまりてはかりにくるあきの
つゆ
あきのつゆはいろかはりやすしとはいへども
なほもとのみどりにもとまりてはかりにくるあきの
つゆ
あきのつゆはいろかはりやすしとはいへども
なほもとのみどりにもとまりてはかりにくるあきの
つゆ
あきのつゆはいろかはりやすしとはいへども
なほもとのみどりにもとまりてはかりにくるあきの
つゆ
あきのつゆはいろかはりやすしとはいへども
なほもとのみどりにもとまりてはかりにくるあきの
つゆ
あきのつゆはいろかはりやすしとはいへども
なほもとのみどりにもとまりてはかりにくるあきの
つゆ
あきのつゆはいろかはりやすしとはいへども
なほもとのみどりにもとまりてはかりにくるあきの
つゆ



きの友則法書の屏風にかの貫之ときの
のひとりとなん友則はいにしへの
名ある人なれば寄月恋おほきにして百首集にも
いる歌ども多きなかに人つくれば
毎月ごとにひとつずつ月ごとに
けぢめをはるこころをもとりて
とりふるまひつるまことにあはれなる
きこえあるべきことなりとぞ
をこれけれどひとりさう正みつるもあしき
とはいはりつるこころ義新古今にあるべきの
こころとをえらばれたるひとりさう
はさまれる別章にて古今にもあるべきこと
のそこひにうめるこころをもとめ
こころのきこえすおほくつとりあまへ
ちとうのうせたるこころをきこえはまつの
ハほとなりとちうのこのきをあつきをれまつ



古今和歌集夏第一

春歌上

あすかがはに　在原元方

年ごとにさくらはさかりなりけれ
ばかはのみなもはなにまがへり

紀貫之

神なびやまのもみぢ葉は春かすみ
たつたの川のにしきなりけり

題しらず

春ごとにはなのさかりはあなれど
あかぬ心にあかれぬるかな

二条のきさきのぬりごめ

雪ふりはつるとしのくれ

題しらず

読人しらず

むめのはなにこのもの学ばせとや
雪ふりはつるとしのくれ

素性法師

さくらいろにそめしたもとをなに
ごろもたつたの山のにしきなりけり

題しらず

よみ人しらず

うぐひすのなきつるなかぬ日はあ
らじとこのもかのもにはなのちる

二条のきさきのみこの
宮の御五月三日の
ものがたりの
けぢめ

文安元年

春は見るに
雪のうちとけあひ
かすみたちそめ
春のこころ

きりぎりすゆき

春のこころ

春の
寅年四時きさ
源ときすけ 當代 道院本 大下男

紀貫之

春の
きさ
春の
きさ
春の
きさ
春の
きさ

大江千里

春たちて野にまかりつかうまつりけるに

在原棟梁　業平朝臣男

春たちて野にまかりつかうまつりけるに

題しらず

春日野のわかなつみにぞ来しかひもなく雪は降りつつ

春日野のわかなつみにぞ来しかひもなく雪は降りつつ

仁和の御時に

[illegible]

春たちて野にまかりつかうまつりけるに

[illegible]

在原行平朝臣

春たちて野にまかりつかうまつりけるに

題しらず

源宗于朝臣

ときはなる松のみとりも春くれは今ひとしほの色まさりけり
哥たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる
つらゆき
わかせこか衣はるさめふることに野へのみとりそいろまさりける
あをやきの糸よりかくる春しもそみたれて花のほころひにける
西大寺のほとりの柳をよめる
僧正遍昭
あさみとりいとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か
題しらす
よみ人しらす
もゝちとりさへつる春はものことにあらたまれとも我そふりゆく
をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥かな
かりのこゑをきゝてこしへまかりける人を思ひてよめる
凡河内躬恒
春くれはかりかへるなり白雲のみちゆきふりにことやつてまし
帰鴈をよめる
伊勢
春かすみたつを見すてゝゆくかりは花なき里にすみやならへる
題しらす
よみ人しらす
折つれは袖こそにほへ梅の花ありとやこゝにうくひすのなく
色よりもかこそあはれとおもほゆれたか袖ふれしやとの梅そも

やまとうた梅のはなのうつろひにけるを
梅花うつろひにけるとよめるを
ひめのみこのもとにてよめるなり

源宗于朝臣

寄花名

題しらず

東三条の右大臣

藤原定方

素性法師

ひめの君とまりてとしをへてよめる

右のうた雅平の式部卿の宮の

うたなり

ゆき

雪あるいまだふるとはなしに

月夜あるいはしろの君とまりてとしをへてよめる

そもしあり

貫之

月夜にいまだふるとはなしに

はるのよ梅花とよめるなり

ふるの郡のやまとうた

はるのよ梅花とよめるなり

はるのよ梅花とよめるなり

なりたてのちにてまうしたれいかの人

あるしかくさたかになむやとりはあるといひいたして
侍りけれはそこにたてりける梅花を折りてよめる

つらゆき

人はいさ心もしらすふるさとは花そむかしのかににほひける

水のほとりに梅花さけりけるをよめる

伊勢

春ことになかるゝ河を花とみておられぬ水に袖やぬれなん

年をへて花のかゝみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらん

家にありける梅花のちりけるをよめる

つらゆき

くるとあくとめかれぬ物を梅花いつの人まにうつろひぬらん

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

梅かゝを袖にうつしてとゝめては春はすくともかたみならまし

素性法師

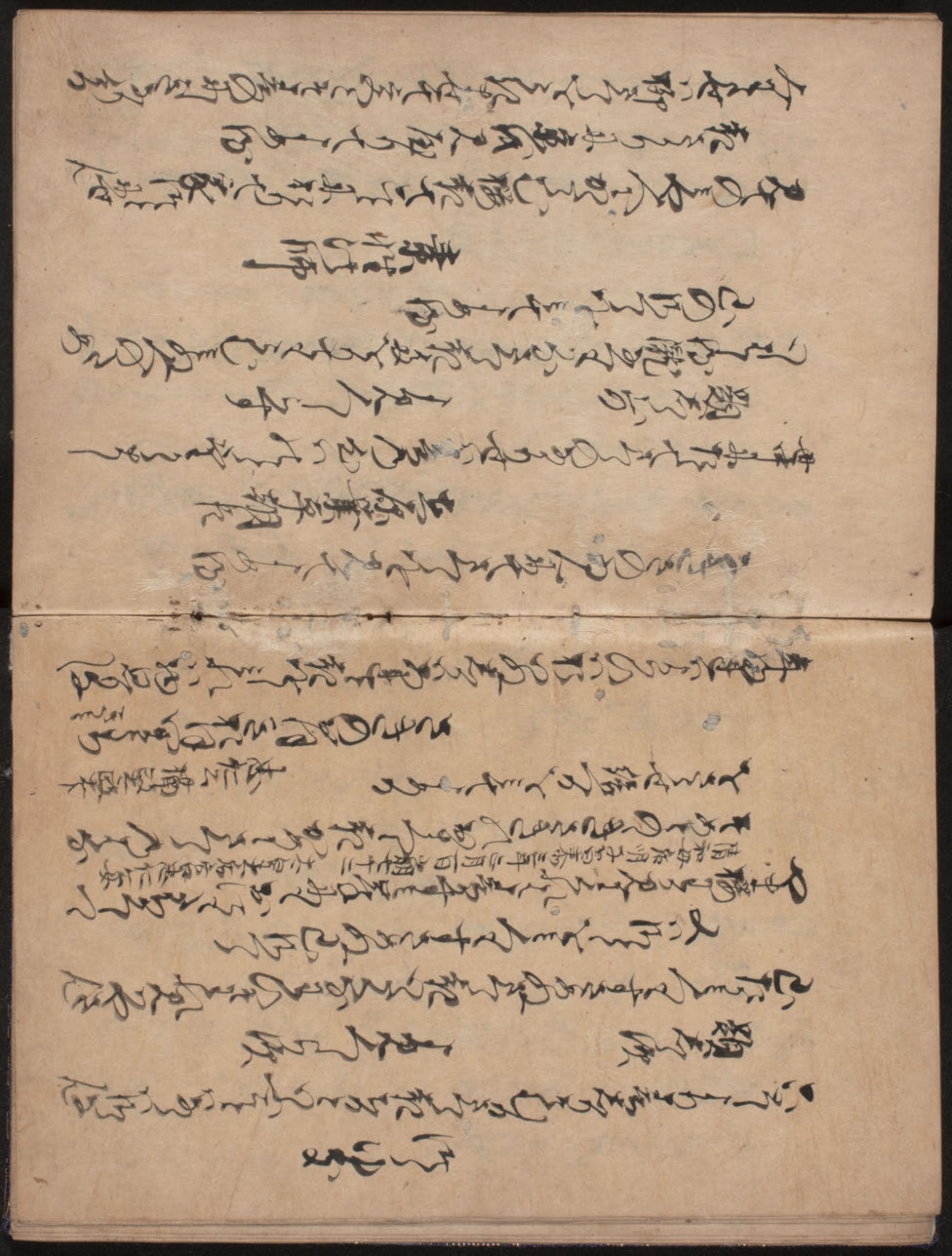
ちるとみてあるへきものを梅花うたてにほひの袖にとまれる

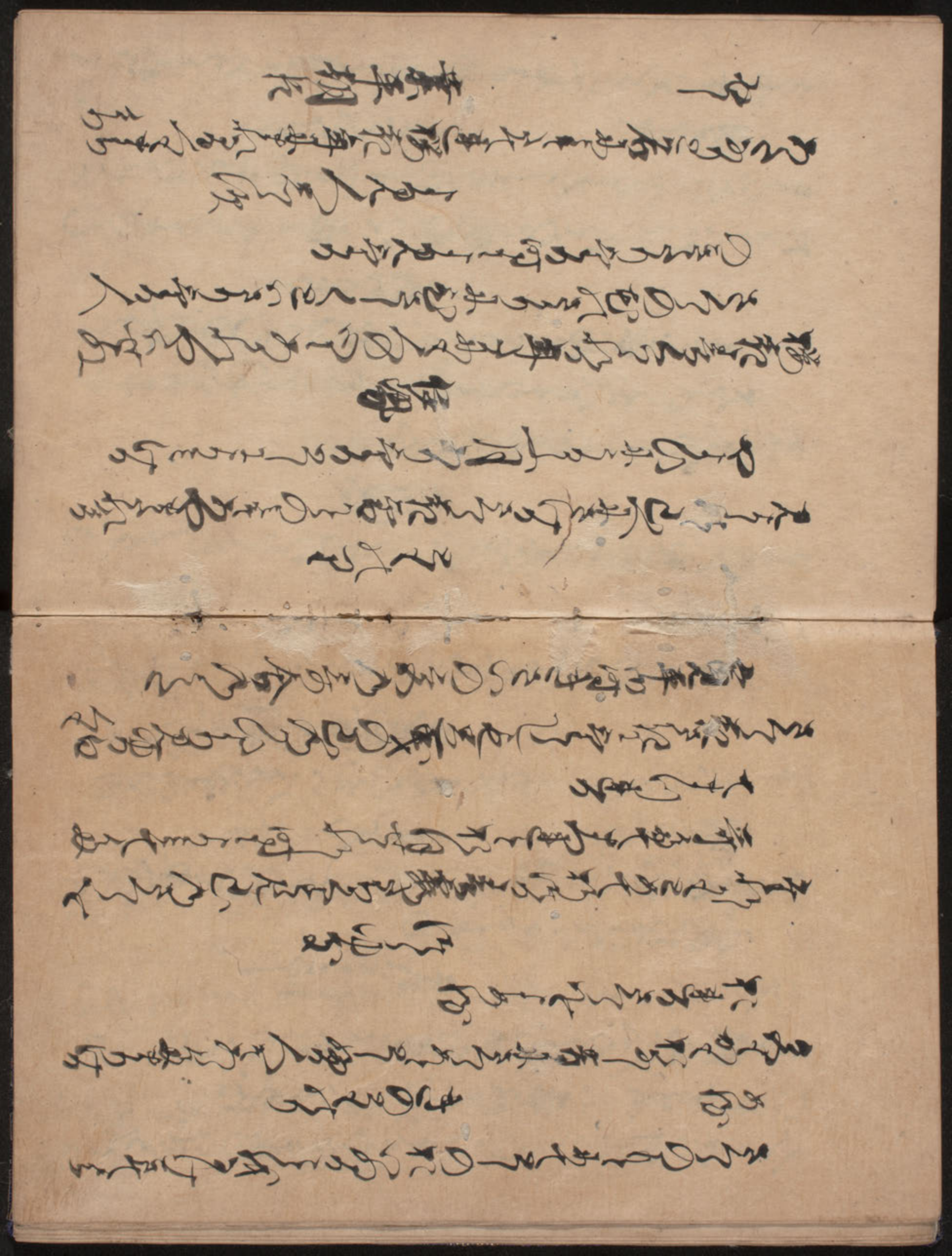
題しらす

よみ人しらす

ちりぬともかをたにのこせ梅花こひしき時の思ひいてにせん

人の家にうへたりけるさくら花さきはしめたりけるを
見てよめる





[illegible]

題しらず　よみ人しらず

[illegible]

[illegible]

きのありつね

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第二

春歌下

題しらず　よみ人しらず

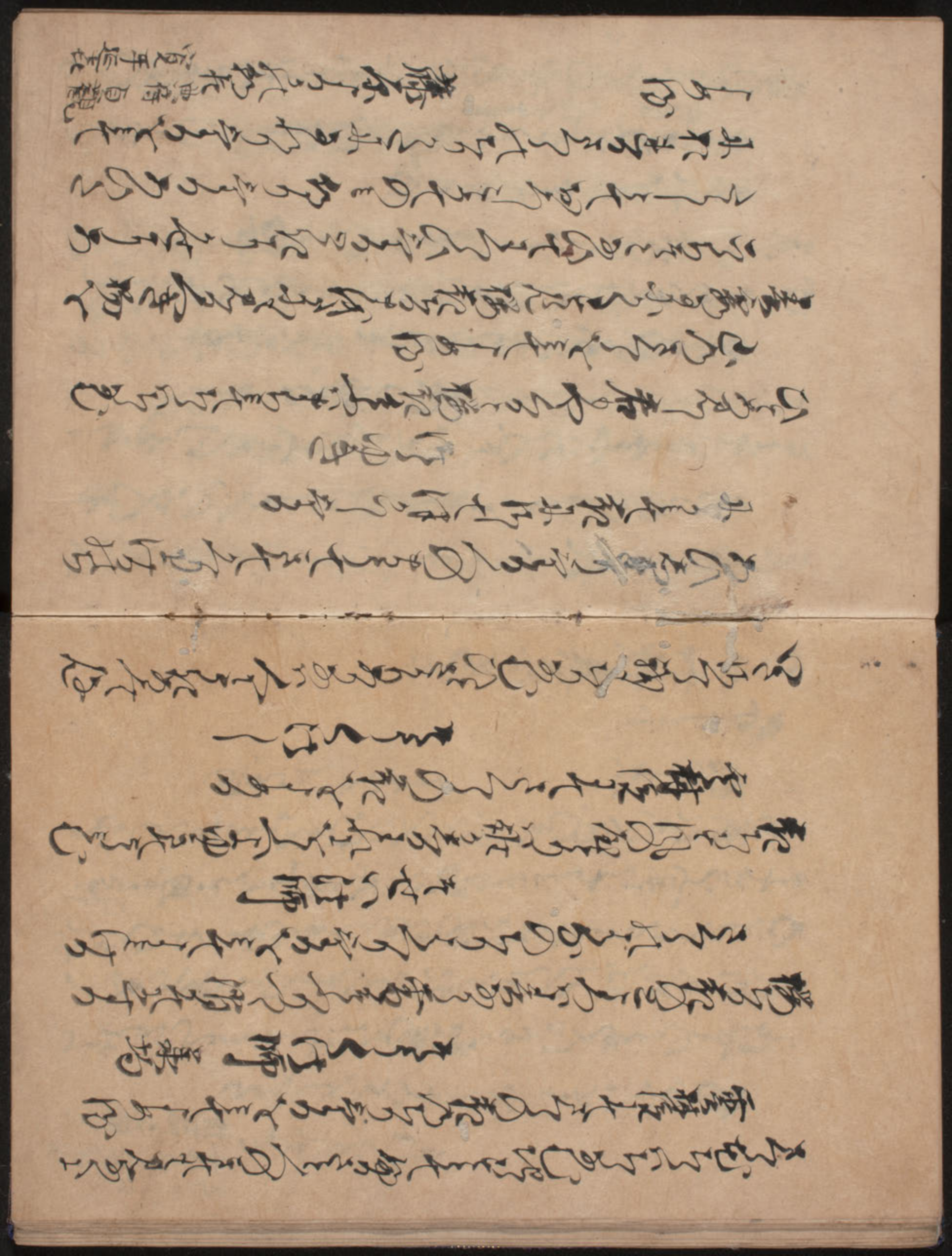
春霞たなびくやまのさくらばな
うつしもうゑばこゝやまとなん

まそかがみ　ちとせをへたる
ちとせまつ　ちとせをへたる

乃つるくらゝそうせ　花橘
ゑにしあるかぜ　ちるのこゝろ

うぐひすのこゑ　ちるはなゝれば
ちるはなゝれば　ちるはなゝれば

信西入道　ふるさと　推古　文徳　母桂五位上紀静子
名二帰女



たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちしさくらもうつろひにけり

待賢門内侍生年

東宮雅院にてさくらの花のみかは水にちりてなかれけるをよめる

すかのゝ高世

えたよりもあたにちりにし花なれはおちてもみつのあはとこそなれ

さくらの花のちりけるをよめる

つらゆき

ことならはさかすやはあらぬさくら花みるわれさへにしつ心なし

さくらのことくちるものはなしと人のいひけれはよめる

さくら花とくちりぬともおもほえす人の心そ風もふきあへぬ

さくらの花のちるをよめる

きのとものり

久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらん

東宮のたちはきのちんにてさくらの花のちるをよめる

ふちはらの好風

春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふとみん

さくらのちるをよめる

凡河内躬恒

ゆきとのみふるたにあるをさくら花いかにちれとか風のふくらん

[illegible]

題しらず　一本　大伴[illegible]　黒主

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

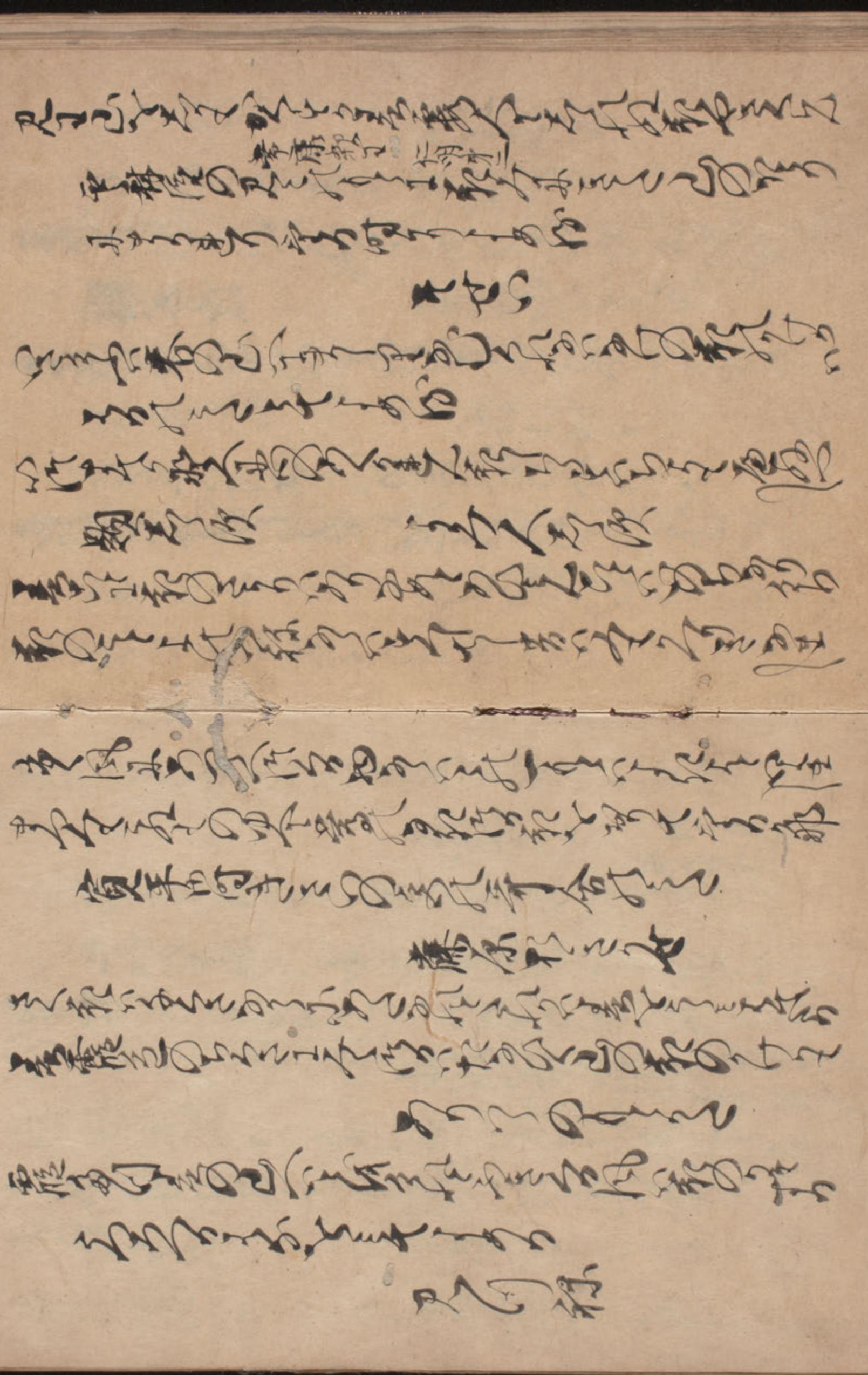
寛平御きさいの宮の歌合のとき

きせいは師

[illegible]

題しらず

[illegible]



[illegible]

題しらず　よみ人しらず

[illegible]

[illegible]

曲侍従[illegible]朝臣　寛平延喜年侍
曲侍系図別当

[illegible]

仁和の中将のみやすどころ[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原あらかた　業平朝臣
中納言有常男

[illegible]

[illegible]

そせい

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

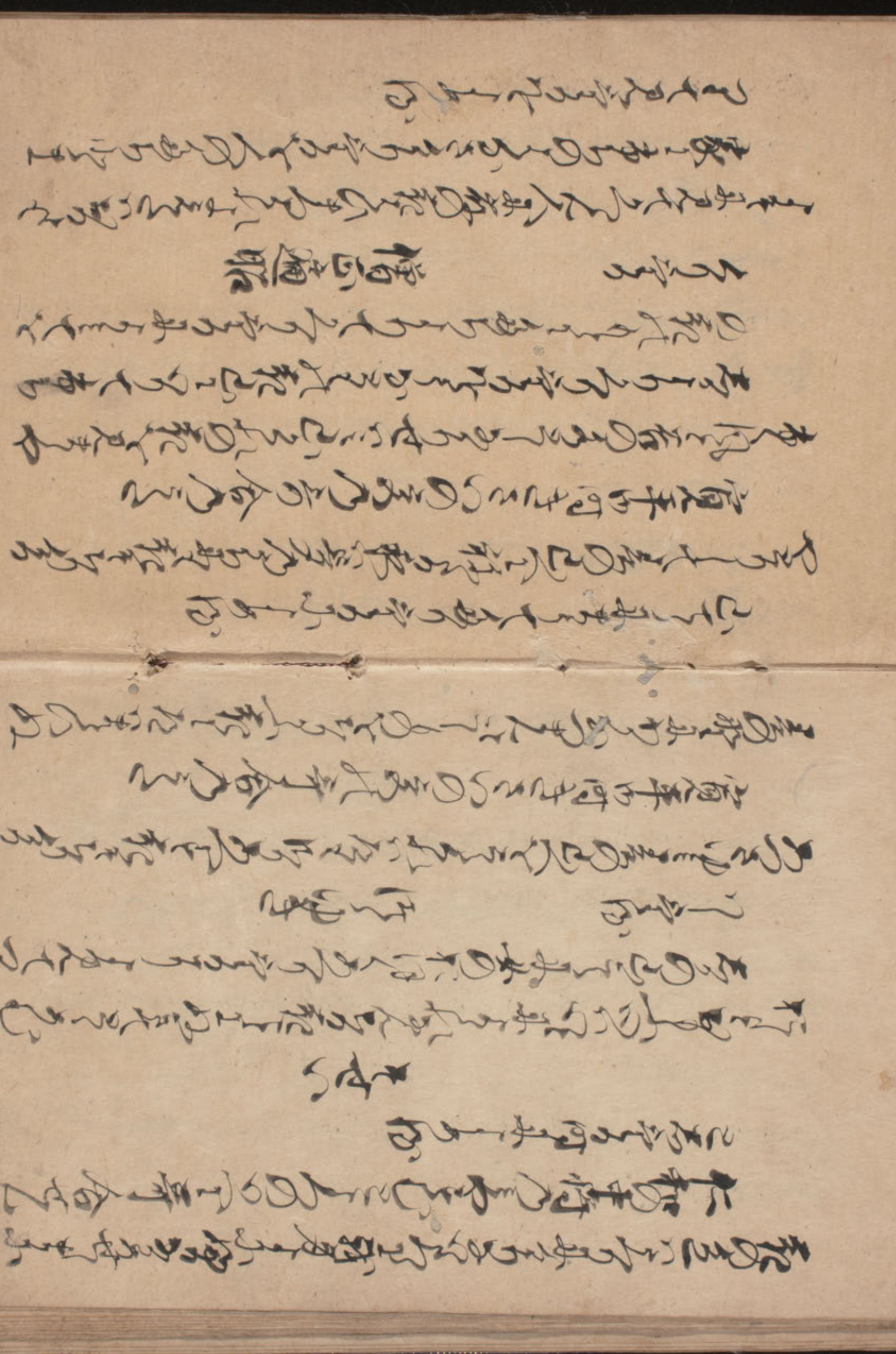
[illegible]

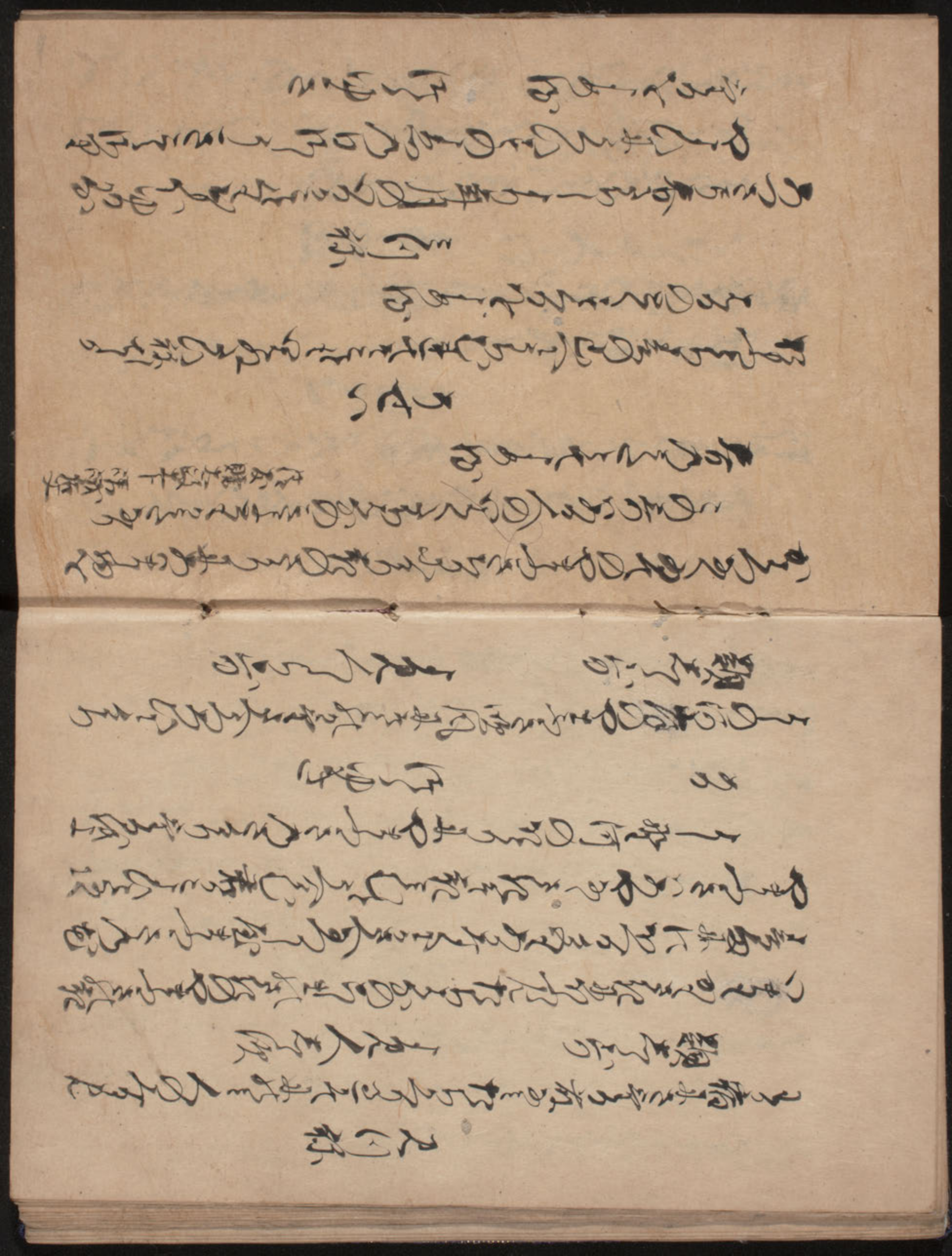
[illegible]

[illegible]

題しらず

こまちのもとにつかはしける　小野小町





なきとむる花しなけれはうくひすもはてはものうくなりぬへらなり

やよひのつこもりかたに山をこえけるに山河より花のなかれけるをよめる

ふかやふ

花ちれる水のまにまにとめくれは山には春もなくなりにけり

はるををしみてよめる

もとかた

をしめともととまらなくに春霞かへるみちにしたちぬとおもへは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

おきかせ

こゑたえすなけや鶯ひとゝせにふたゝひとたにくへき春かは

やよひのつこもりの日花つみよりかへりける女ともを見てよめる

みつね

とゝむへき物とはなしにはかなくもちる花ことにたくふ心か

やよひのつこもりの日あめのふりけるにふちの花ををりて人につかはしける

なりひらの朝臣

ぬれつゝそしひてをりつる年のうちに春はいくかもあらしとおもへは

亭子院の歌合に春のはてのうた

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第三

夏歌

題しらず　よみ人しらず

[illegible]

[illegible]

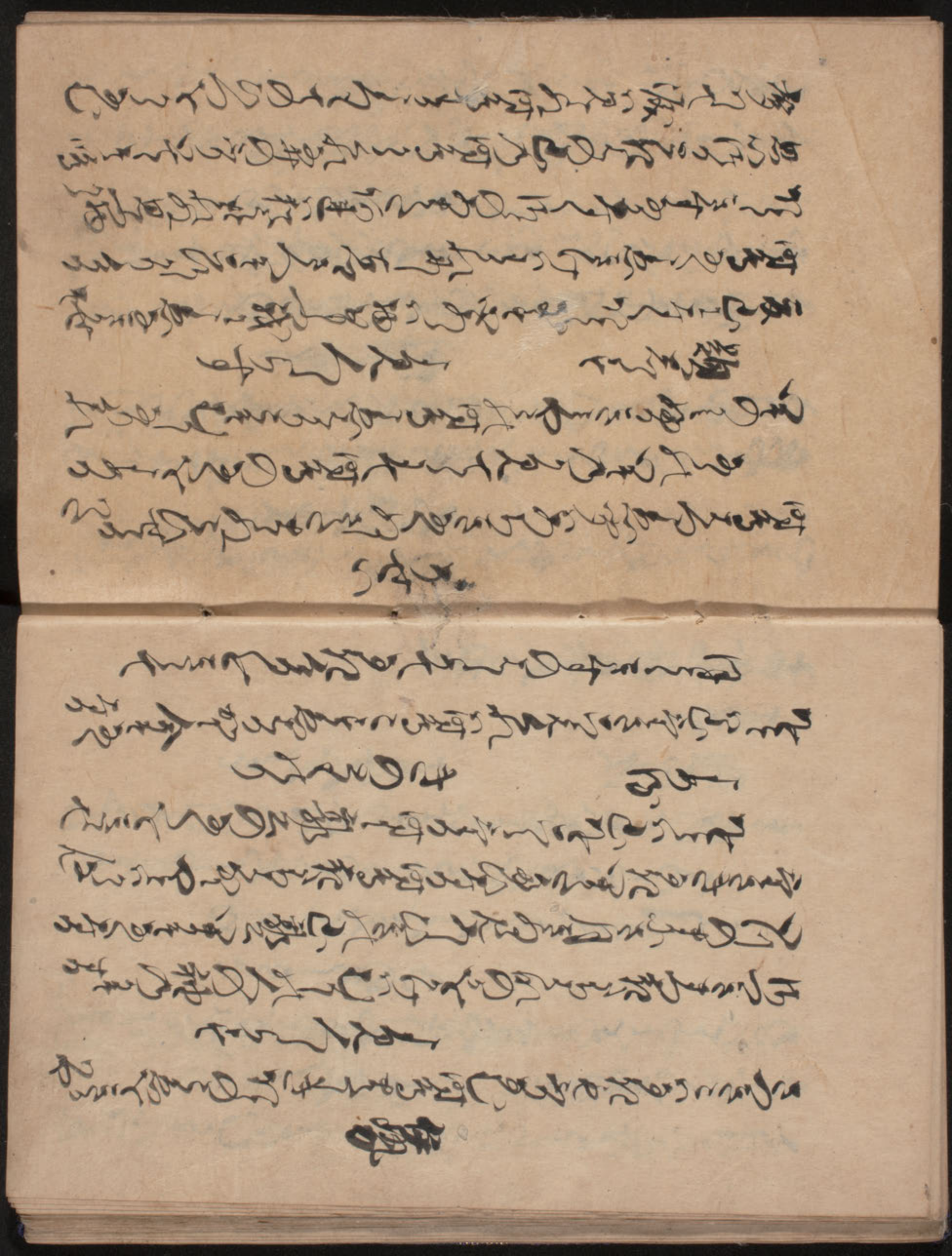
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



さみたれのそらもとゝろにほとゝきす[illegible]

[illegible]

[illegible]（卿）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]（卿）

[illegible]

[illegible]

[illegible]（卿）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月の[illegible]

[illegible]

夏の夜はまたよひなからあけぬるを雲のいつこに月やとるらん

となりよりとこなつのはなをこひにおこせたり
けれはをしみてこのうたをよみてつかはしける

みつね

ちりをたにすゑしとそおもふさきしよりいもとわかぬるとこなつの花

みな月のつこもりの日よめる

夏と秋とゆきかふそらのかよひちは
かたへすゝしき風やふくらん

古今和歌集巻第四

秋哥上

秋立日よめる

藤原敏行朝臣

秋きぬとめにはさやかに見えねとも風のをとにそおとろかれぬる

秋立日うへのをのこともかものかはらに河
せうえうしけるともにまかりてよめる

つらゆき

河風のすゝしくもあるかうちよする浪とゝもにや秋はたつらむ

題しらす

よみ人しらす

わがせこが衣のすそを吹かへしうらめづらしき秋のはつかぜ
昨日こそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹
秋風の吹にし日よりひさかたのあまのかはらにたゝぬ日はなし
ひさかたのあまのかはらのわたしもりきみわたりなばかぢかくしてよ
あまの河もみぢをはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ
こひこひてあふ夜はこよひあまの河きりたちわたりあけずもあらなん
寛平御時なぬかの夜うへにさぶらふをのこども歌たてまつれとおほせられける時人にかはりて
よめる　　　とものり
あまの河あさせしら浪たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける

これさだのみこの家の歌合のうた
ふぢはらのおきかぜ
契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたびあふはあふかは
なぬかの日の夜よめる
凡河内みつね
年ごとにあふとはすれどたなばたのぬる夜のかずぞすくなかりける
たなばたにかしつるいとのうちはへて年のをながくこひやわたらん
題しらず
そせい
こよひこむ人にはあはじたなばたのひさしきほどにまちもこそすれ
なぬかのよのあかつきによめる

いまはとてわかるゝ時は天の河わたらぬさきに袖そひちぬる

八日の日よめる

源むねゆきの朝臣

みぶのたゞみね

けふよりは今こむ年のきのふをそいつしかとのみまちわたるへき

たいしらす　よみ人しらす

このまよりもりくる月のかけみれは心つくしの秋はきにけり

おほかたの秋くるからにわか身こそかなしき物と思ひしりぬれ

わかためにくる秋にしもあらなくにむしのねきけはまつそかなしき

物ことに秋そかなしきもみちつゝうつろひゆくをかきりと思へは

ひとりぬる床は草葉にあらねとも秋くるよひは露けかりけり

是貞　仁和二　元慶四年時四十同寛平

これさたのみこの家の歌合のうた

いつはとは時はわかねと秋のよそ物思ふことのかきりなりける

かみなりのつほに人々あつまりて秋のよをしむ歌よみける

ついてによめる

みつね

かくはかりをしと思ふよをいたつらにねてあかすらん人さへそうき

よみ人しらす

白雲にはねうちかはしとふかりのかすさへ見ゆる秋のよの月

さよなかとよはふけぬらしかりかねのきこゆるそらに月わたる見ゆ

[illegible]

大江千里

月をみるにものをもの思ふ秋はあれど秋ばかりは

[illegible]

ひさかたの月の宮なる秋はぎ

[illegible]

紀貫之

月とともあれば

秋はぎの月の光をあらみ

[illegible]

藤原忠房

人の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず

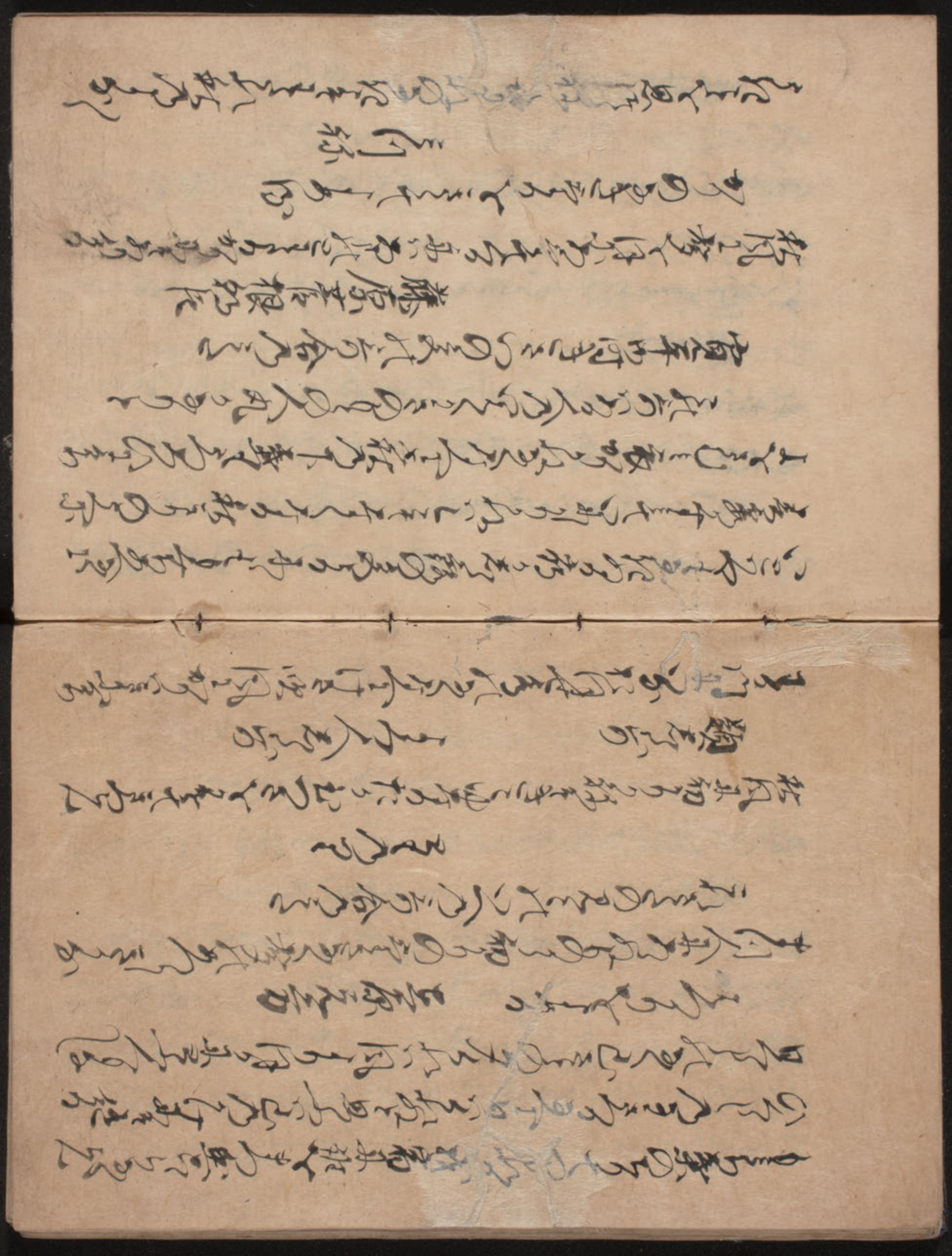
[illegible]

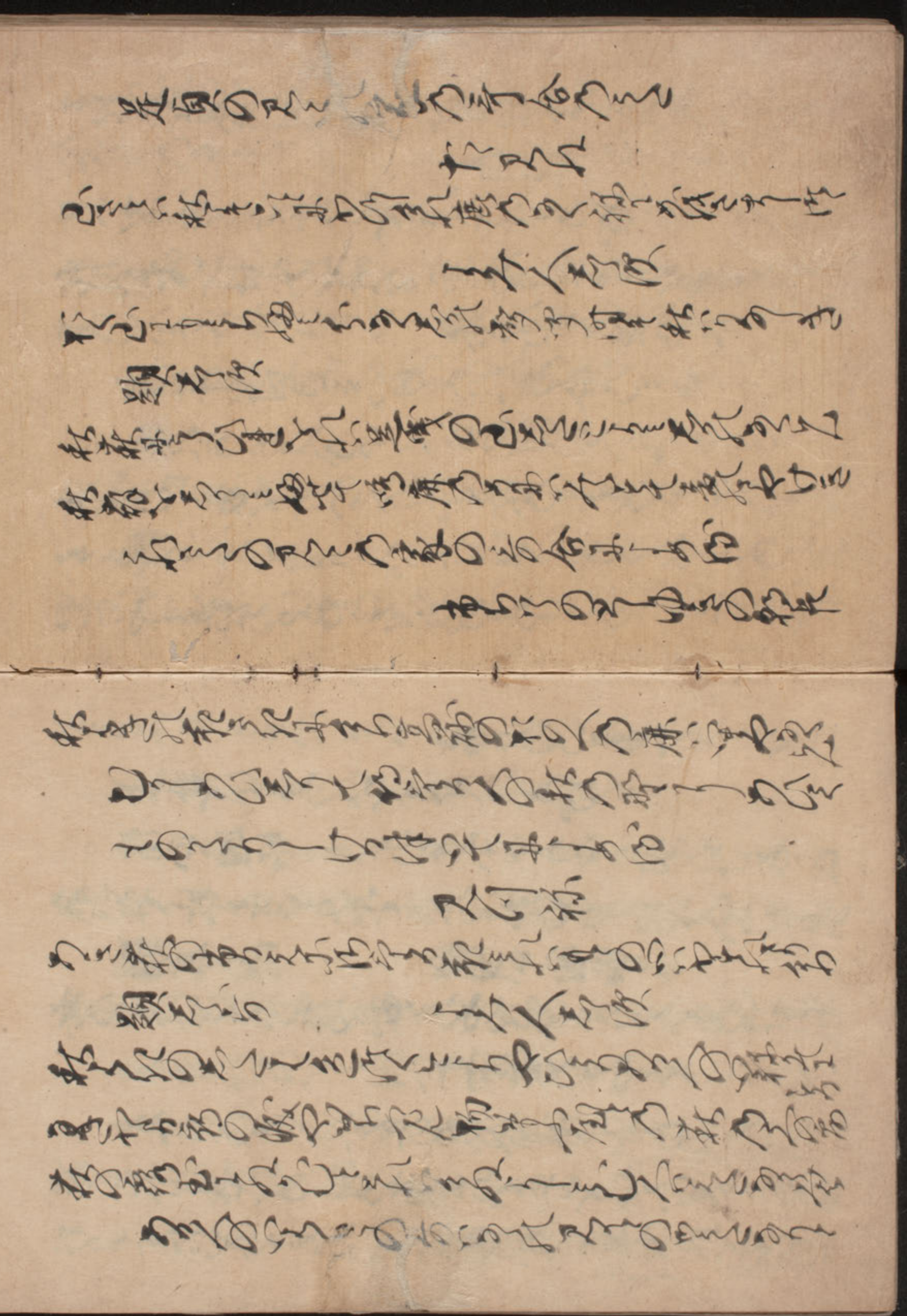
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]





[illegible]

是貞の[illegible]家の[illegible]合[illegible]あり

文屋[illegible]

題しらず

[illegible]

僧正遍昭

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あらけなくとうきて人みつらて空る
やうせて人のうえ見う為ふ
ゆき
あらくなる波まとれる月はいけ
あらくなる波とよあ
ゆ
きせい

ゆくすえのこそあてつまれ秋の野になるあさきもて春なる風も

平貞文

題しらず

今よりはいとへあふ月の秋ときはあるかりなる
宵年所はさいの高れ方合のうち
ありりのしるやか

秋乃野に萩の葉のたりて秋とき風そまれ神とあれ

素性法師

我のみやあはれと思へつゆ草の色なる秋のうつろへ
題しらず

よしのゝ人しらず

天とりかりの声の春は見て秋はあの秋の月今
り春は秋のつて見く秋の野に思ふ人みこりめて
月ふさ三あいすむわさ寄ふ人のちいろひめた
仁和の天てみとみ行りまて空河市の立紅
四位せしてたちまて空乃ちみ遍昭て
の家とやうりの河と春と秋の野に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

僧正遍昭

[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第五

秋歌下

[illegible]

文屋やすひで

[illegible]

秋の歌合しける時よめる

[illegible]

紀ちかのり

[illegible]

題しらず

よみ人しらず

[illegible]

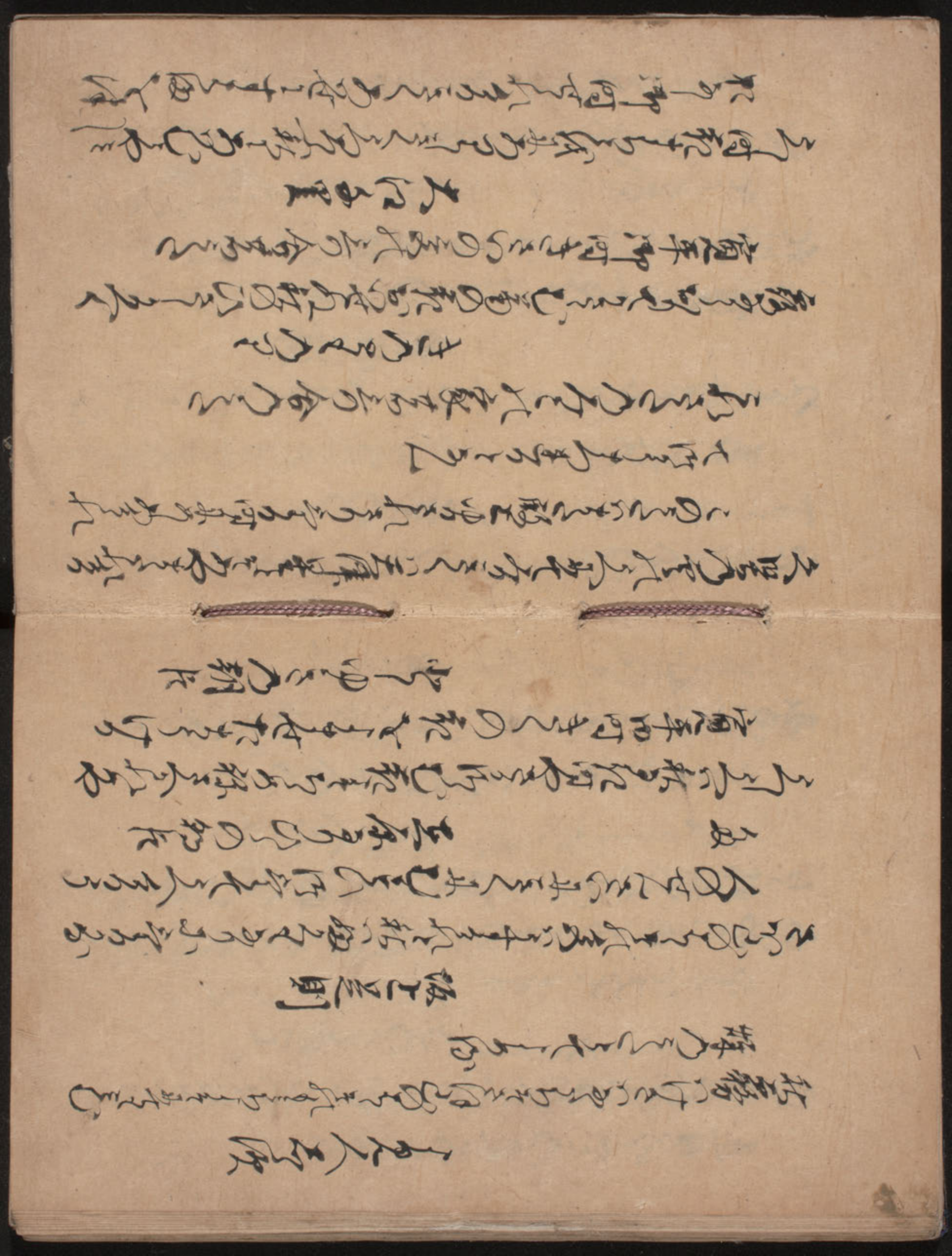
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

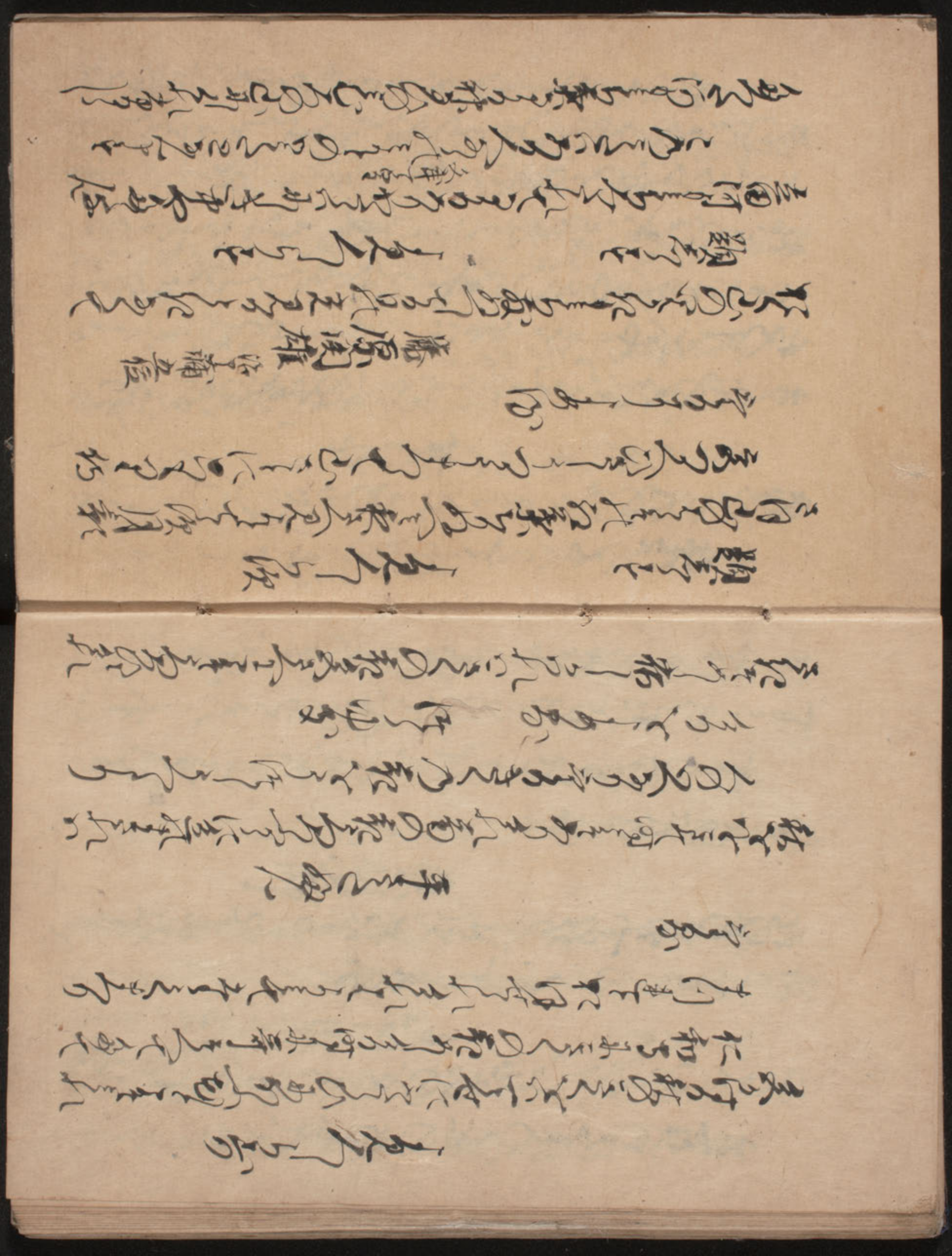
[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]



みいろとりのうしなりし　世の不淫人兎角龜毛の同
ごとくいとをあるじとしるこころ　ものの心
秋風ふかんをあはれゆくあきの秋をうらめき
輝いさあるを秋いの宿ふかりしあはれ道ふかしてをしへ
市人をてをあるこひしるを秋をうらてたをあるこ
秋月をしへやうふちをすいたるいたるもの数をたるこ
ちくしのあれたちをさふかをいの秋の中秋をあられいうれ
第九ふれ霧のみをそよふしをあるをれいうれ
中秋夜の月をみたるをそよふけ

せきを

僧正遍昭

僧人のをそちをちをあれ
二条の后の春宮の御
屏風ふかをつ川ふかをつ
をりをるとて歌ふかをて
をしあるか

そせい

ちをとをれをすをるふかをあいをるをさ浪やをそ川ん
ありはらの業平

ちりやすの秋らをさを子をを三田河ふをれふをを川ふを
ふををの月をれ家ふかをの合ふをを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

坂上是則

[illegible]

けふ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛平四年[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第十八

雜歌

題しらず　よみ人しらず

あまの河みきはすずしく秋の月ひかりあらそふ水のそこかな

その方をしらず　源宗于朝臣

心里にたえぬさまをしる人のなきをしたへば見へいでぬらむ

題しらず　よみ人しらず

たれかこの月の光をきよみとて水をたたへ山をくまなく

いまとりはつるまでなにしおはばこのとしごろのあはれまさらむ

あはれいかばかりかはせみの山のもみぢのにしきたちまさるらむ

あはれいかばかりかはせみの山のもみぢのにしきたちまさるらむ

まつ宿の雪をとはばこたへずとおもへばかなしかりけり

その方をしらず　紀貫之

雪ふればこずえをりせぬ花なれば春をあだなる物とこそ見

春乃山ゆきあへてしらぬ物なれば

紀ありすき

古今和歌集巻第七

賀歌

題しらず　よみ人しらず

[illegible]

仁和の御時僧正遍昭

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きのくれなゐ

かりのゐる山の名をとりてゐるかとりて

貞保 二条后宮 母二条后 延長二年薨

はるのやどのみなれこそさくらの千歳をへまし

[illegible]

人のこゝろ[illegible]

藤原[illegible]

[illegible]

本集 [illegible] 延長元年薨 母従四位下紀[illegible]子名 女

きのゆき

[illegible]

[illegible]

[illegible]

素性法師

[illegible]

内侍のかみ　右大将　延喜聖主　延喜七年位二位

[illegible]

[illegible]

夏

[illegible]

秋

[illegible]

冬

[illegible]

春宮の亮　延喜三年　延喜十四年二月廿五日　延喜十六年十月廿五日　延喜

三年三月廿九日

曲侍藤原[illegible]

古今和歌集夫と第八

離別哥

藤原行平朝臣

ちはやふる神のいがきもこすといふ
物をおもふ人わかれぬる

よし人志

すゑつ世にかゝるためしの人をこそ
かなしきものゝはじめなりけ
ゝ

ちりぬるのくれとをみまくほしき
ものかな

ちりぬるのゝちはいとゝかなしき
ものかな

きこえぬ人をこそ
見のこすけふまでもかゝるものを
なりけるかな

きのつらゆき

ふるさとの人のこゝろ
ふるさとの人のこゝろ
ふるさとの人のこゝろ
ふるさとの人のこゝろ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

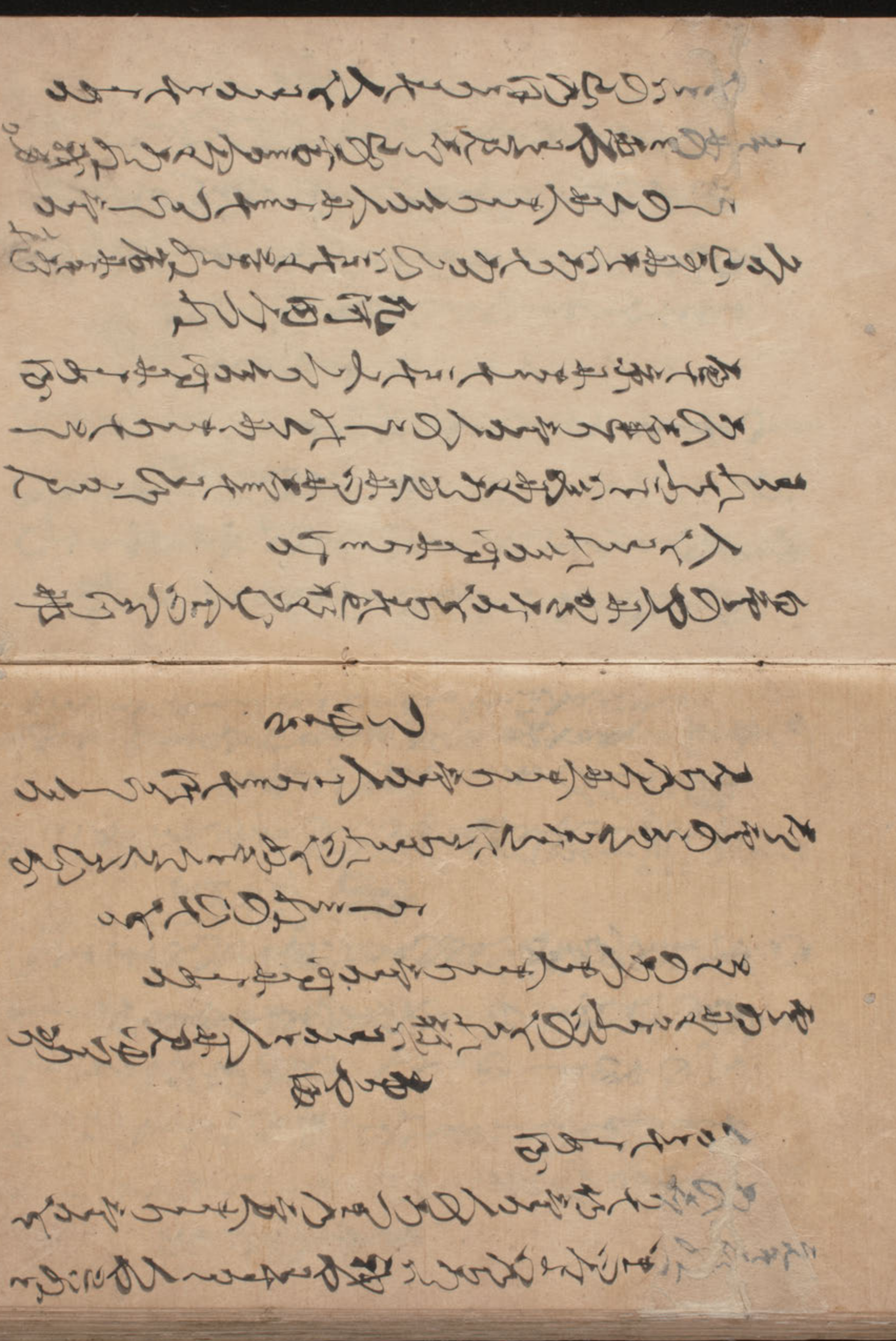
[illegible]

題しらず

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

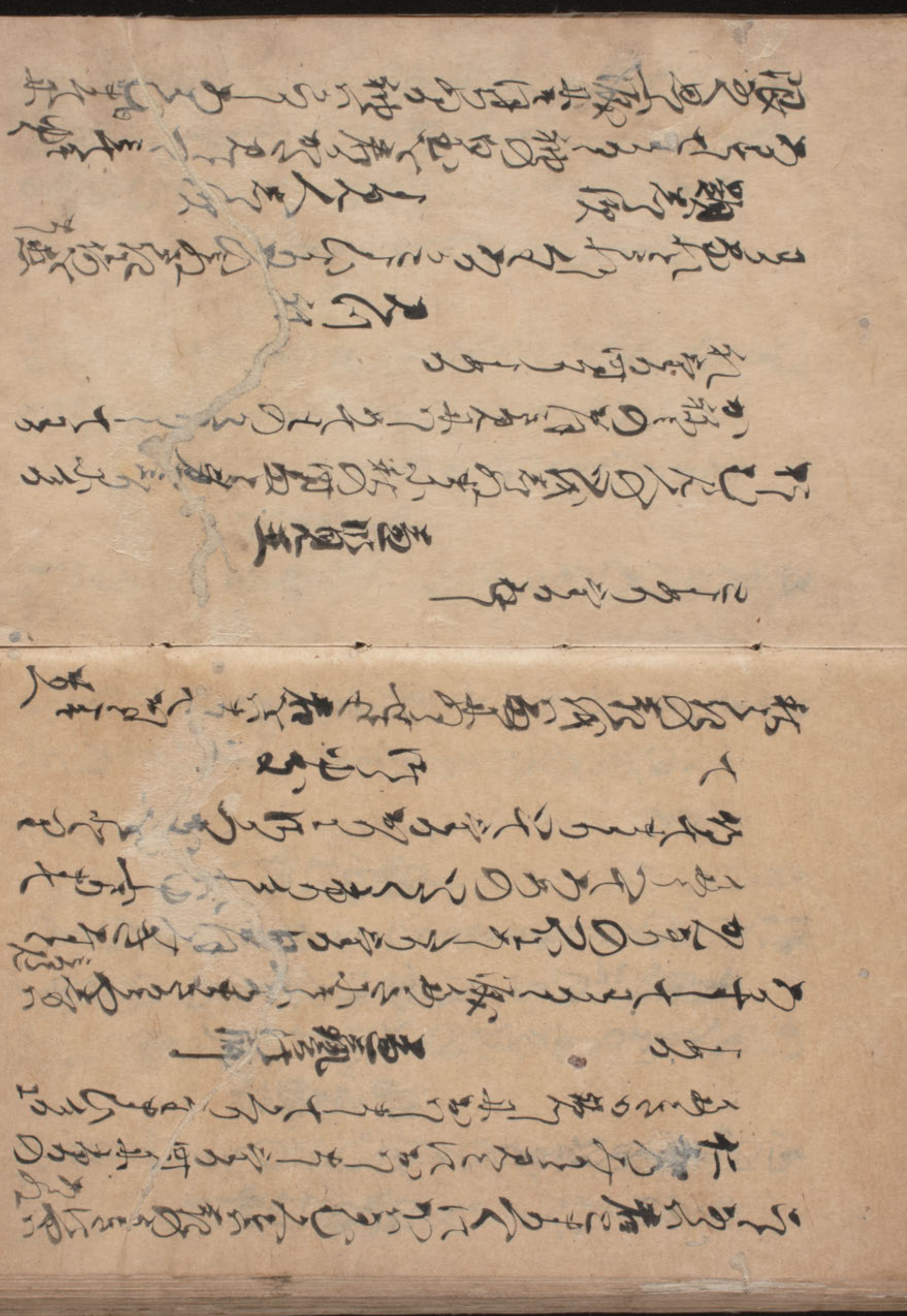
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



古今和歌集巻第九

羇旅歌

もろこしにわたりて月をみてよめる

安倍仲麿

あまのはらふりさけみれば春日なる
三笠の山にいでしつきかも

ながらへばまたこのごろやしのばれむ
うきよにふりしあまのつりぶね

あかねさす
月はのぼりぬ
あしひきの
やまのかなたに
かくれぬと
人はみるらむ
あをやまに
ふじのやまぶき
さきにけり
ひとりこしまの
なみにうつらん

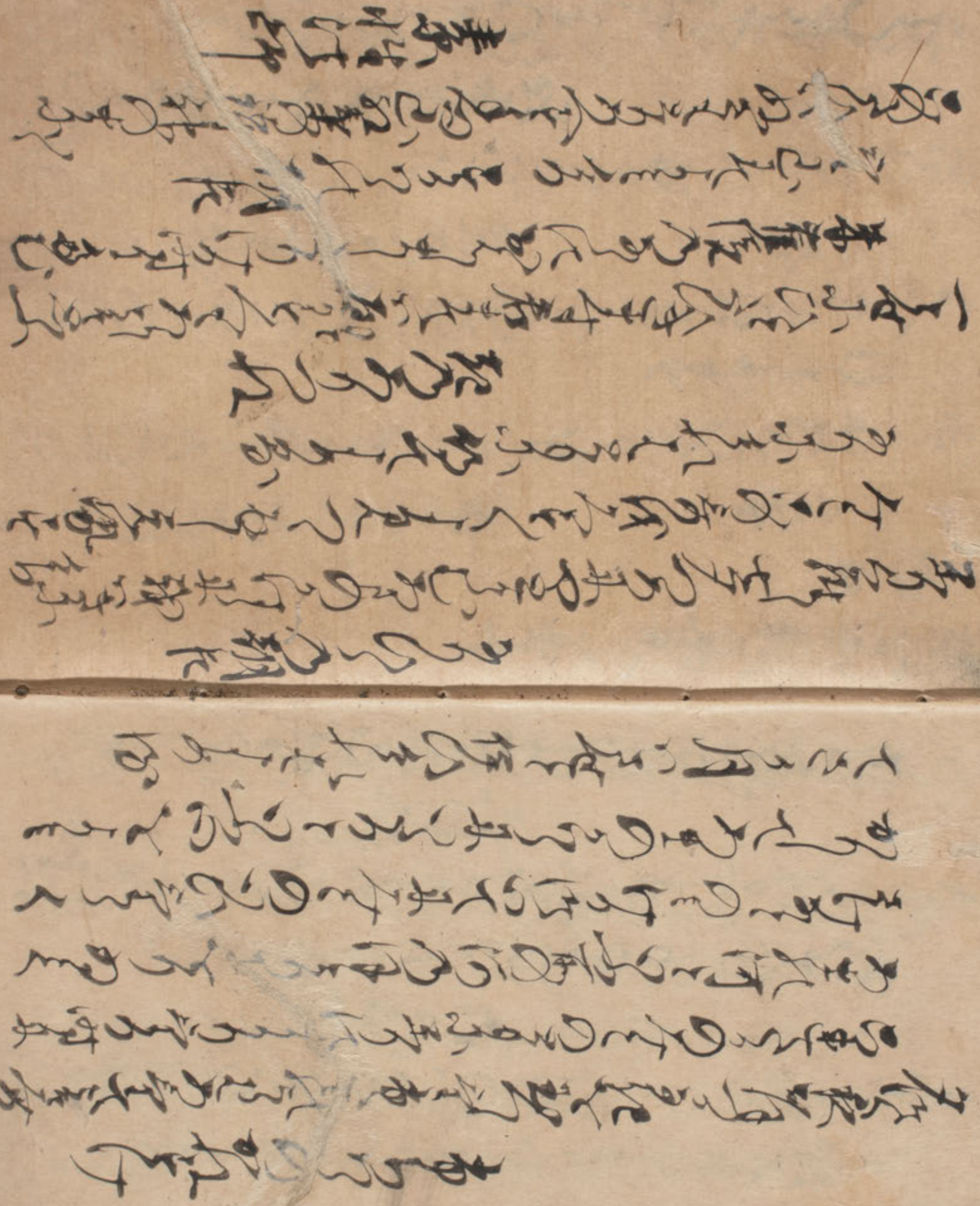
都をいでて
いまはかぎりの
あしたには
ほのぼのとこそ
しまかくれゆく
ふねをしぞおもふ

これをいかゝ人のいとなみたる人もいかゝ
あつまれる人々なりけるとかたりつたへ
たるこの国やはらかにしてこゝはみきの
河のほとりにたつことなくてかくこゝろ
とまるものなりけりさつきのつゴもり
はなたちを白ぬりにしたるやうにひろまれる
ものとあり

五月雨のつゴもりのころ

ひさしのみなもとにいけりけるかたいとをかし
とこの国にこのけふのことを
みなこの河のほとりにあつまりて都のこと
をかたらひ

なほこれいかゝ河のほとりにあつまりゐたる男
やまとにはあらぬからきゝふ所なれば
みなそれかの人物をえらびとりわけたる
まことにあはれなりけるかなとこそ
なきかなしびけれ
すゝりこれ人物をえらびとりたる男
しるしとなりけるかりにふるさとをこ
ひてかの河のほとりにあつまりゐて
みなたびをしたりけるとこそ
ふねをしたりけるとこそ
ふねをしたりけるとこそ
ふねをしたりけるとこそ
ふねをしたりけるとこそ
ふねをしたりけるとこそ
ふねをしたりけるとこそ
ふねをしたりけるとこそ
ふねをしたりけるとこそ



[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第十

物名

藤原ときゆきの朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ちめ

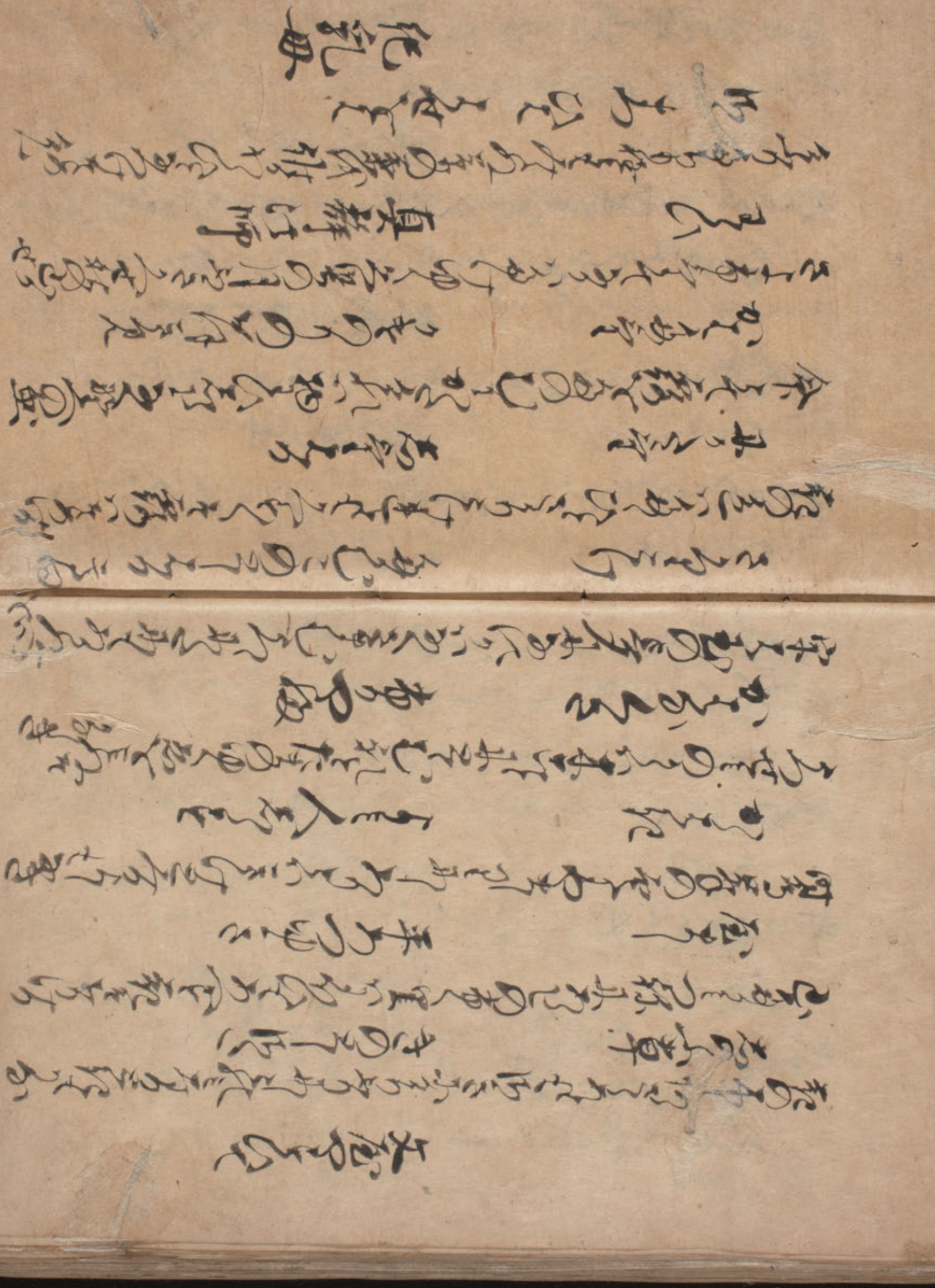
[illegible]

[illegible]

[illegible]

我いとをさうにあるを見付て初てうへかり
をとゝ　おとゝ
白露　むすあくるやうかの秋あて　紫ゆへて
わさ露をとけをまちて秋をむつまじ　やまぶきの屋
朱雀院のときの御つかさの内侍とゝ
いはけなくと白のうへ　藤ゆへてよろ
ゆふ
とゝ　とゝ
秋ちくれいうふかう白露のとけ　家　色
きちくれむ
秋ちくれいうふかう白露のとけ　家　色
うたかり

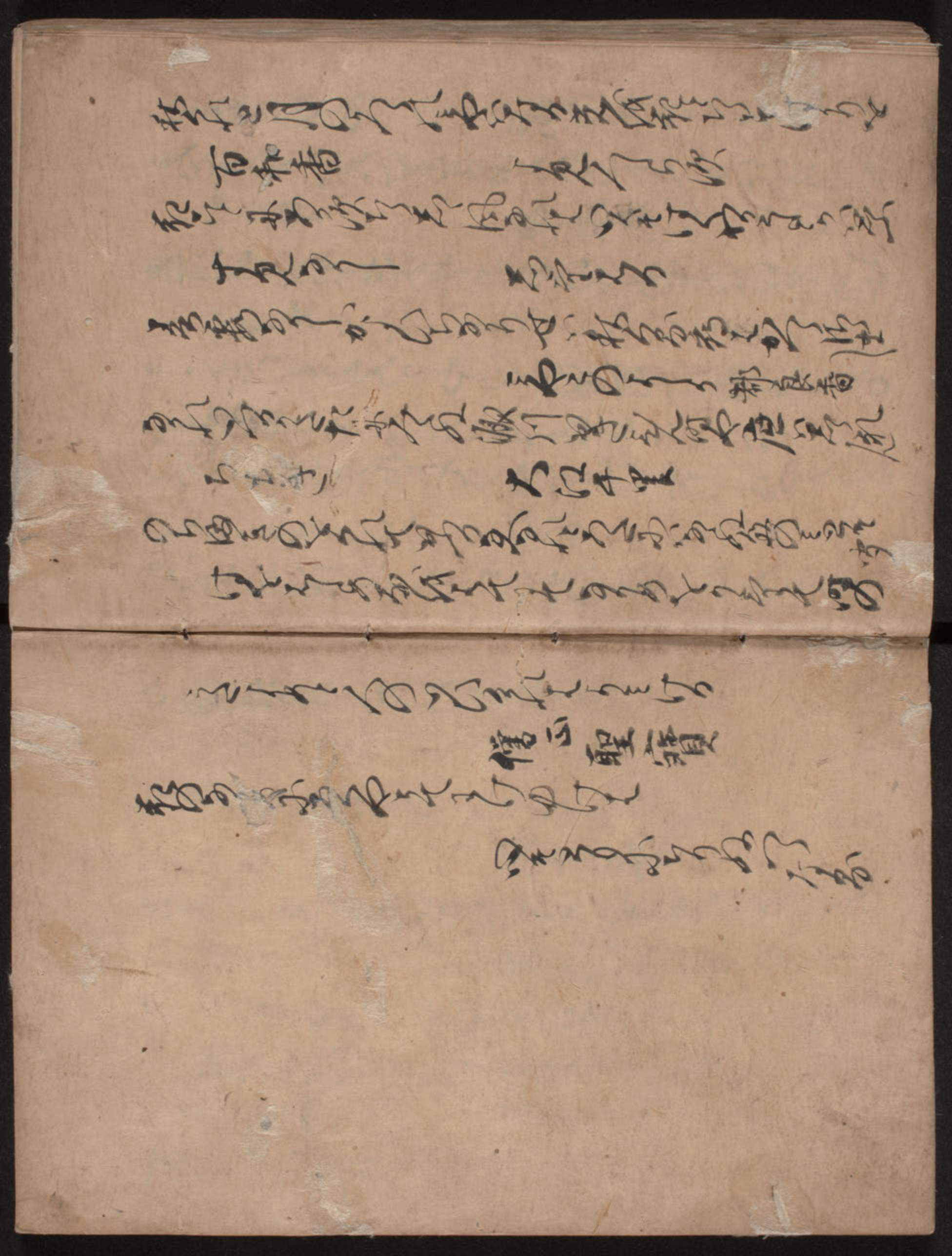
夫成
うけ　ひ　つ　さ　ふ　の　秋　ち　く
ま　う　ふ　む　し　の　秋
我宿の秋ちくれとつ　む　秋　ち　ま　ま　や　ち　ま　ま
ひ　ち　ま　ま
ありこ　た　ひ　ち　く　ち　秋　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　



[illegible]

[illegible]

[illegible]



古今和歌集卷第十一

戀歌一

題しらず　よみ人しらず

ひさかたの月のかつらのもとにすむ人はかくこそ思ひそめけれ

素性法師

春霞たなびくやまのさくらばなうつしにとりてをりかざしつる

紀貫之

春雨はいたくな降りそ桜花まだ見ぬ人の恋ひつつをせむ

藤原かねすけ

白浪の立ちかくすまで降る雪に春と思へばうぐひすぞなく

在原元方

逢坂の関はこえぬと思へども人の心をえこそ知らねば

よしのぶ

世中にかくしてもがな和歌の浦に潮満ちくれば潟かくれぬる

あまのりもの

天くだりいましてつくる

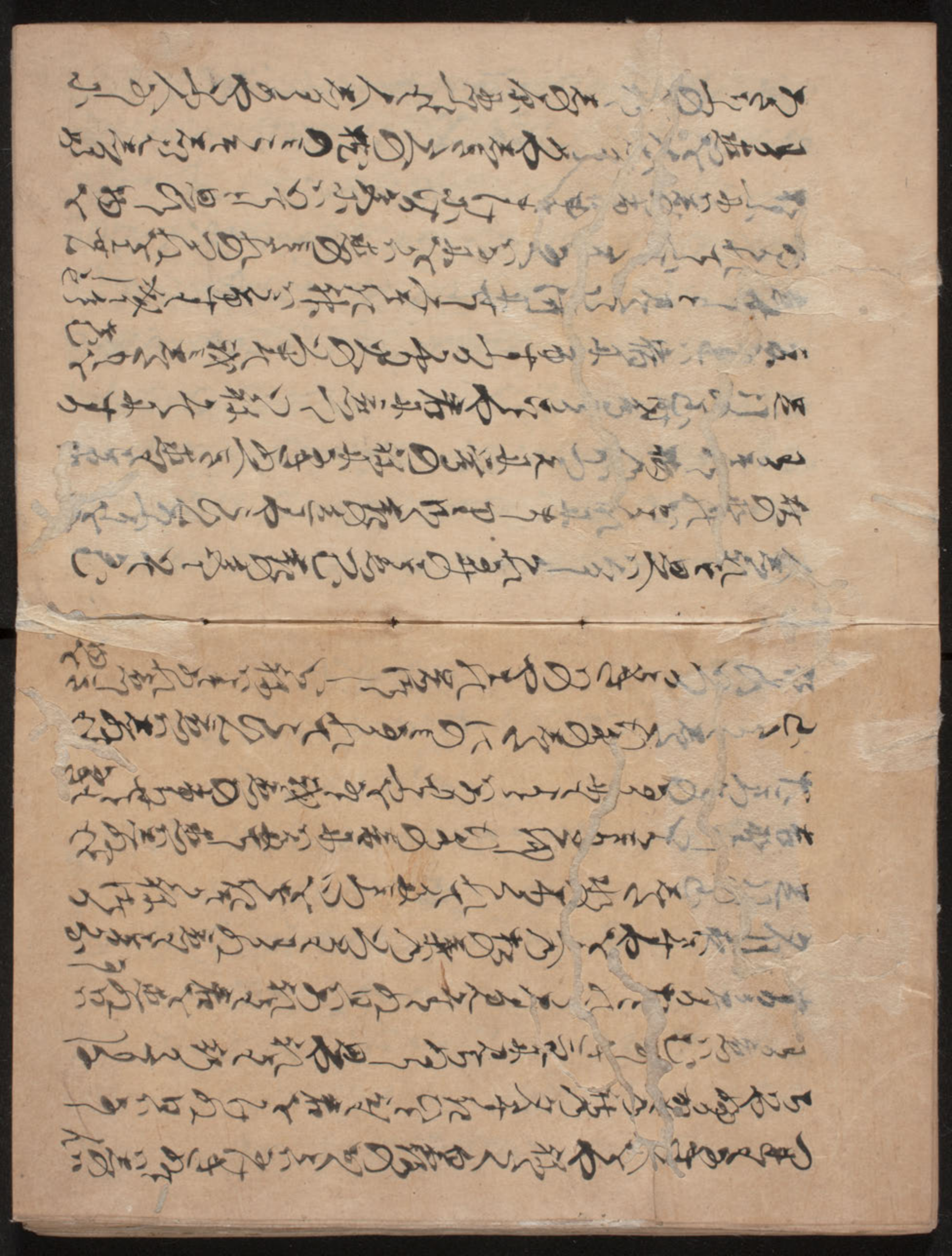
左大臣

人をこそ見めとはなしに春の来ていとどかすみの立ちまさるらん

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

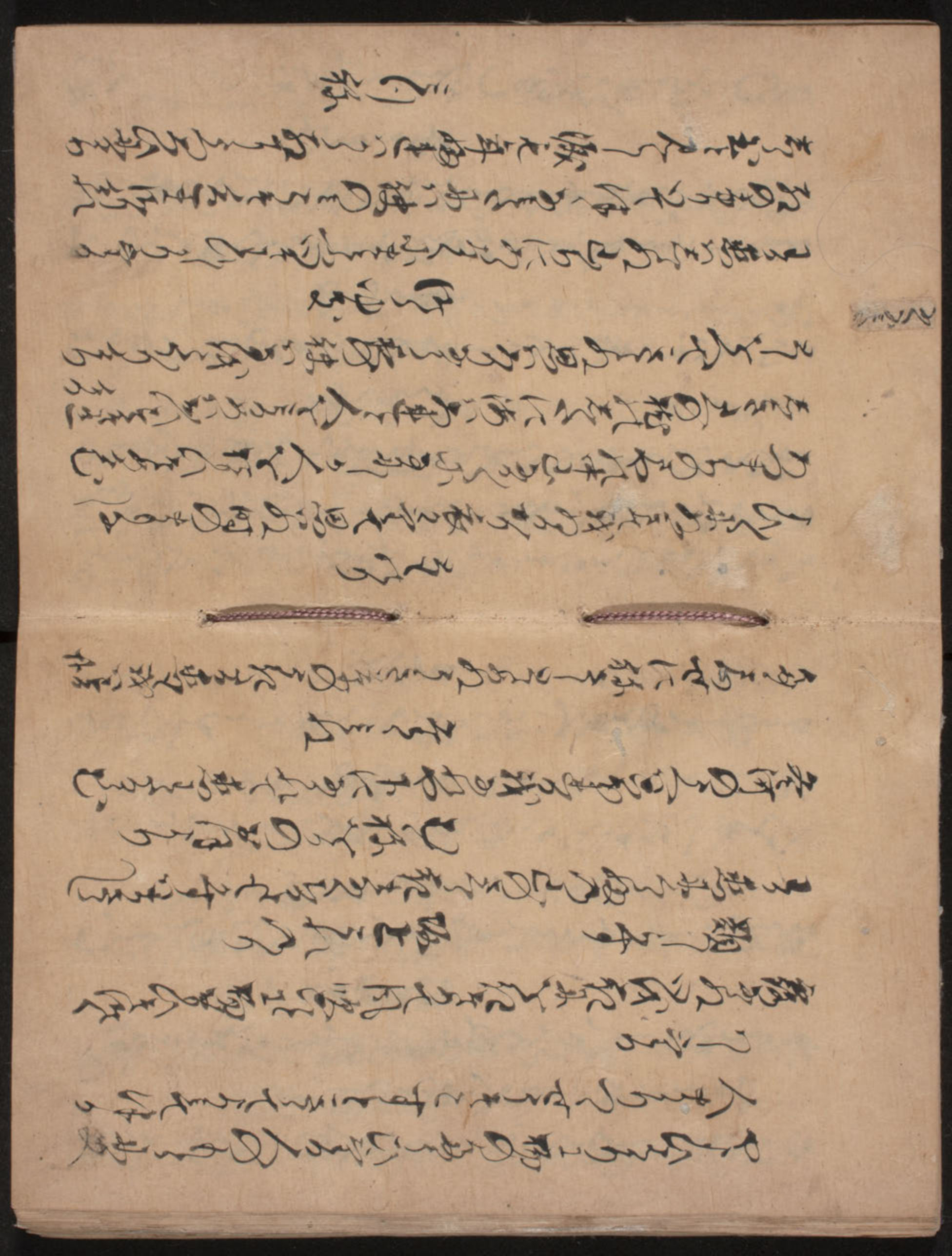
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

そくこれ

風をいたみ[illegible]

月をみて[illegible]

[illegible]

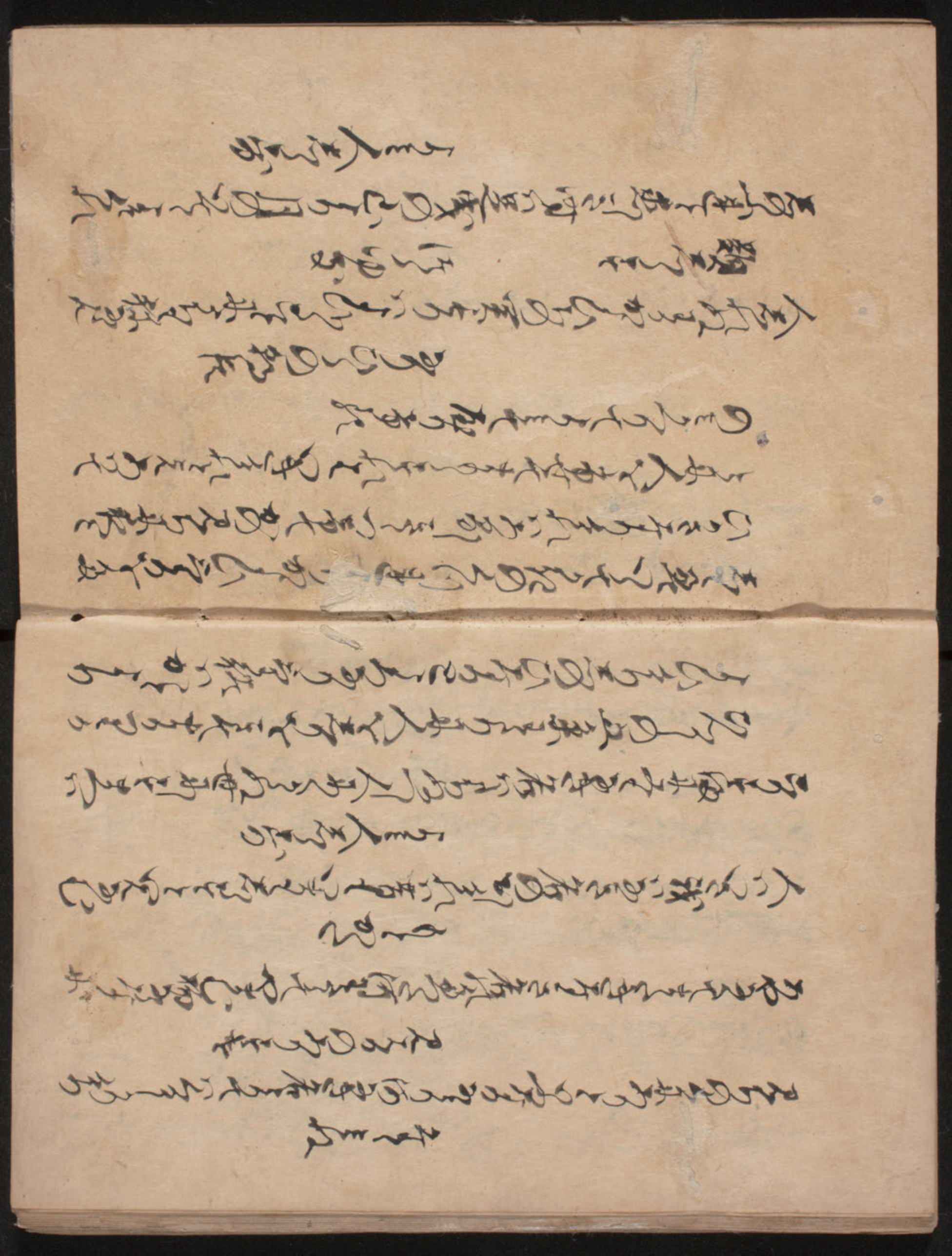
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かの母ありてやすみしり
ありつるの朔氏
うさこそ神いひつめおもそかなるきうたなん
題しらず　よみ人しらず
よろこのこそとそくへくれつるいとかけとりあき
つさいかゆこそいさあらはゆとみまくかさしつるれつて
あらあ東の方白雪とつもりのいまれかくふるあきあと
このこそうくのつく祈下人丸うこうのり
秋の野に出てきてあるの神ちるあそこ秋をひらまり
ありつるの氏
源宗于朝臣
小野小町
今のきさ我身とうこ春の雨ふるまのあり多ゆくう
わすれてこうのあきあの日ふるやとはるこ思ひ
こ市のあるこれ
上州のつまうくなて別れ曉ちりにたのうれて
ありつるのもとうこ
あるこのきさ月ふる浪のれいうにこのこ二ふり
ふるとり風みそれうつ浪あれいあつまきにきき佐



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

業平朝臣の伊勢國にまかりたりける時に
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清原あり[illegible]

平貞文

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

恋哥四

題しらず　よみ人しらず

[illegible]

[illegible]

[illegible]

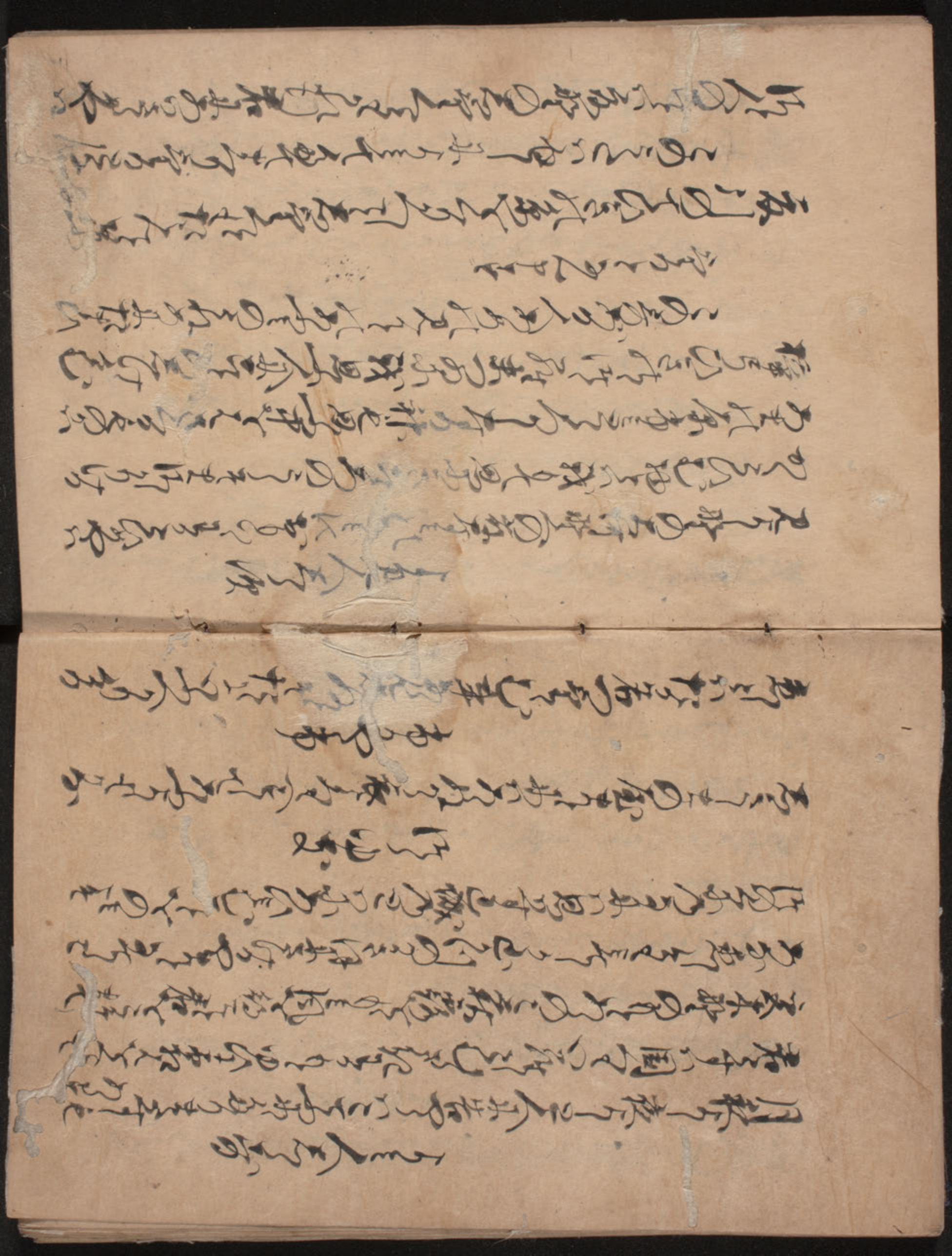
右と云い人まれなりもしあるもの[illegible]

仮名

[illegible]

[illegible]

[illegible]



和国ふみの事ども
寛平御時きさいの宮の歌合のとき
すがわら
せきの春こそけふのかぜなれ春たちぬと思へば
題しらず
とき人しらず
宣旨のたまはせて物のまゐりてとく思ひしかども
思ひもかけぬ人のまゐりたれば
思ひもかけぬ人のまゐりたれば
思ひもかけぬ人のまゐりたれば

右の月つきとさすがのふるまひ
かつしてはなさんとあり
つゝてはすまじきとのゝ
曲侍従原ゝの朝臣
たのめつゝこしのゝ今のいつゝ我身のれいきこゝ
せて
道隆の右大将ゝ
とゝまてゝの業ひろひ
題ゝ
ゝ
ゝ朝臣
玉葉の道つゝ
ゝ
ゝ

中納言原の光雅
延長八年二月中旬
ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第十五

恋歌五

五条のきさきの宮の女房のもとにつかはしける

かつみるかつてものかなしけれかりそめにこそ人はかよはめ

わいさゝ村竹とそよのなかはなにしめの花さかりみ月のかすみこめるをけふ

そをらいてかのみ山ぬけくまそわかるゝたゝりつゝきにあせりてよめる

左兵衛督源頼氏

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

藤原かねすけの朝臣

藤原ありひらの朝臣 伊勢 在原業平朝臣

ゆくへもしらぬ恋の道かな

藤原かねすけの朝臣

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし恋しきかたにまどふ心は

藤原ときはの朝臣

あしの葉にあきの風ふくこのごろは人をあはぬ夜ぞ多き

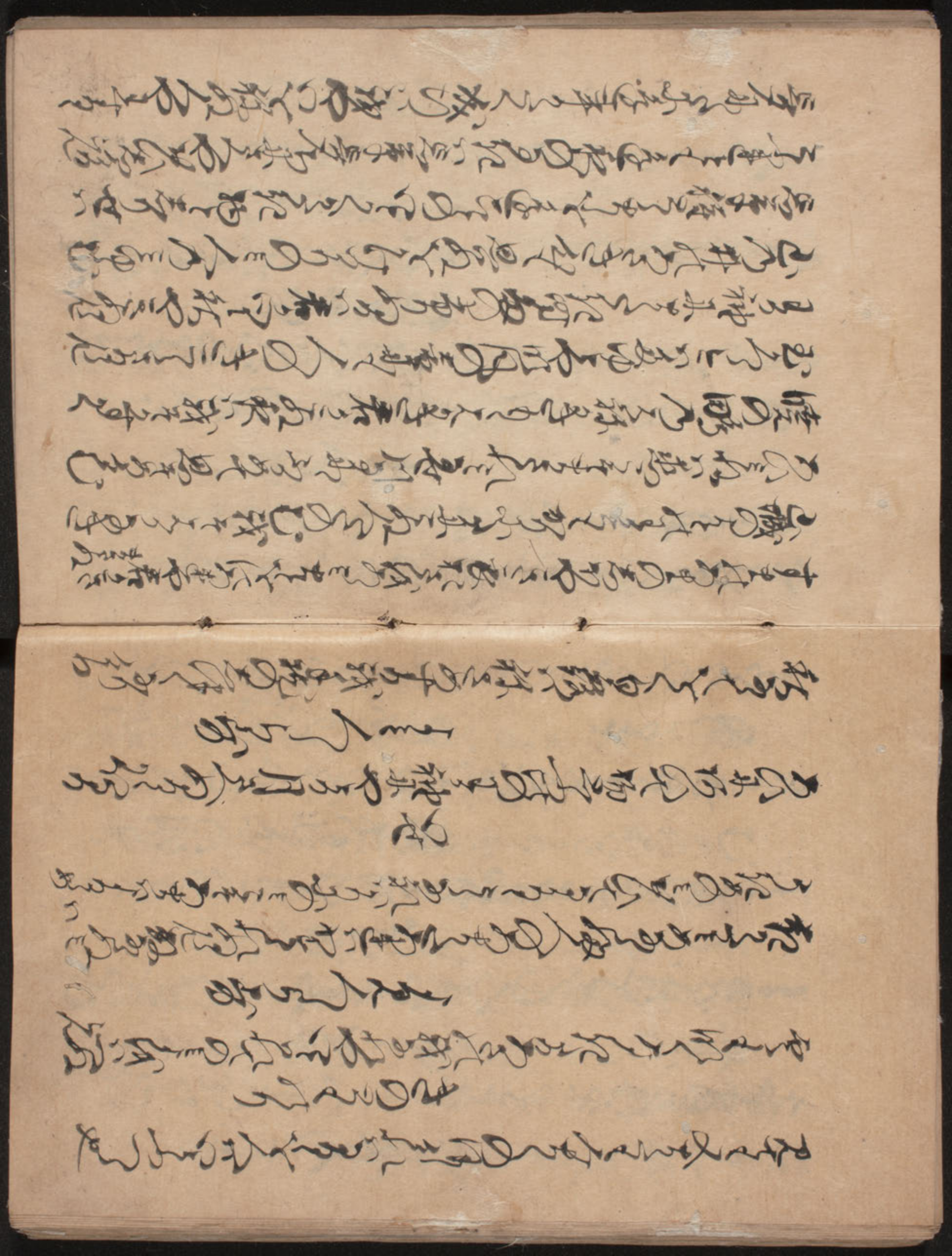
九河内ときはの朝臣

ゆくへなみ山にまどひぬ郭公なにをかたのもしるべにせまし

もとやす

ゆくへなみ山にまどひぬ郭公なにをかたのもしるべにせまし

よみ人しらず



[illegible]

[illegible]

[illegible]

伊勢

見ぬ世にいかなるかとかたらんと思へど
題しらず　　常康親王
常康親王の子　仁明御子

ほまれをもとめしかひもなしとは
とこそ我身のあはれなりけれ

のこりなく

人を見ぬ事にはあらねどかりそめの
ありあけの月にきぬぎぬ
をしまれけるとこそ

小野貞樹

ゆふさりはいかなる風のまどはしに
ひとりしぬるとあくるまでの
てはまつらむ

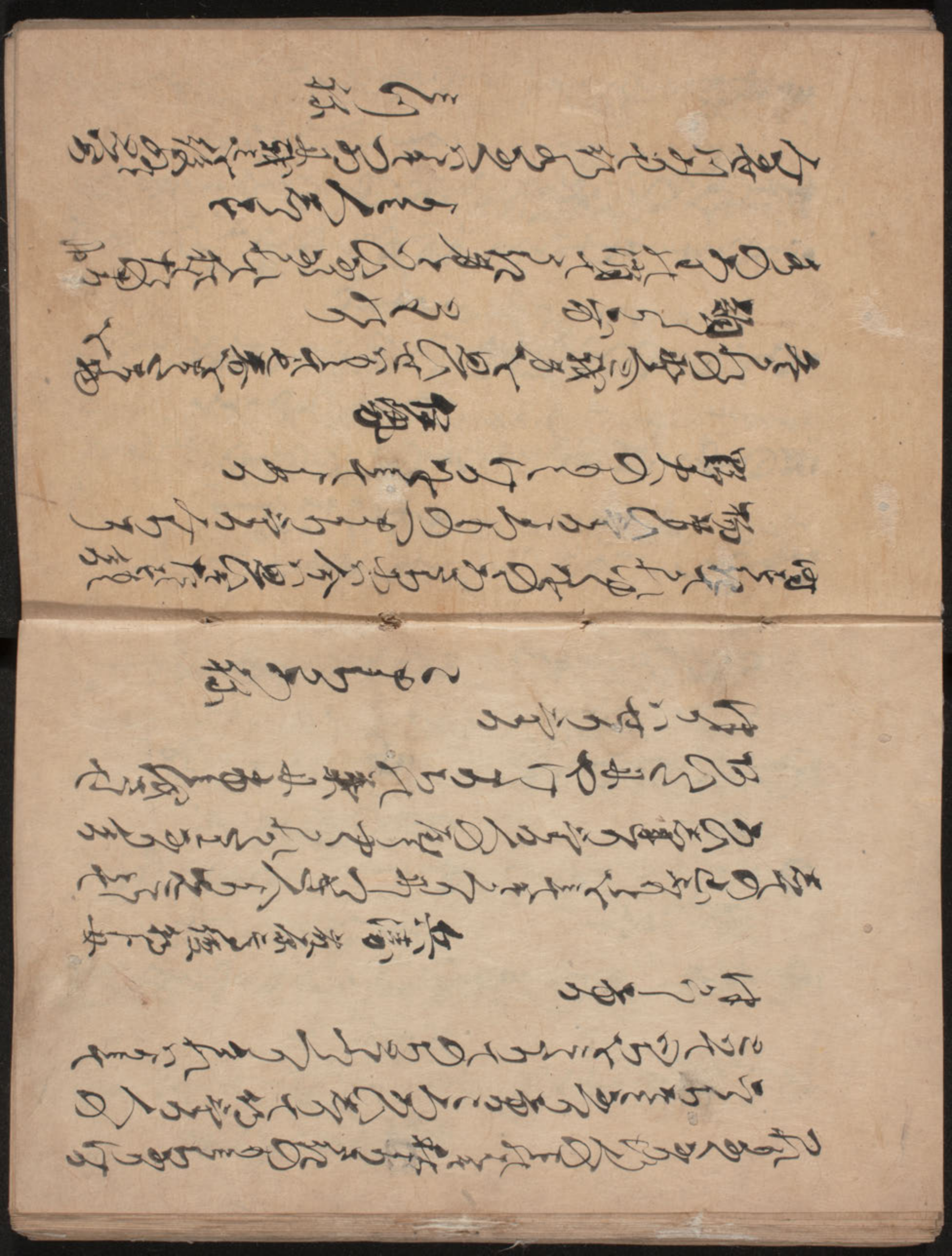
あまたたびあはんとすれどあはぬ
ゆふさりはいかなるもののこころぞ
なり

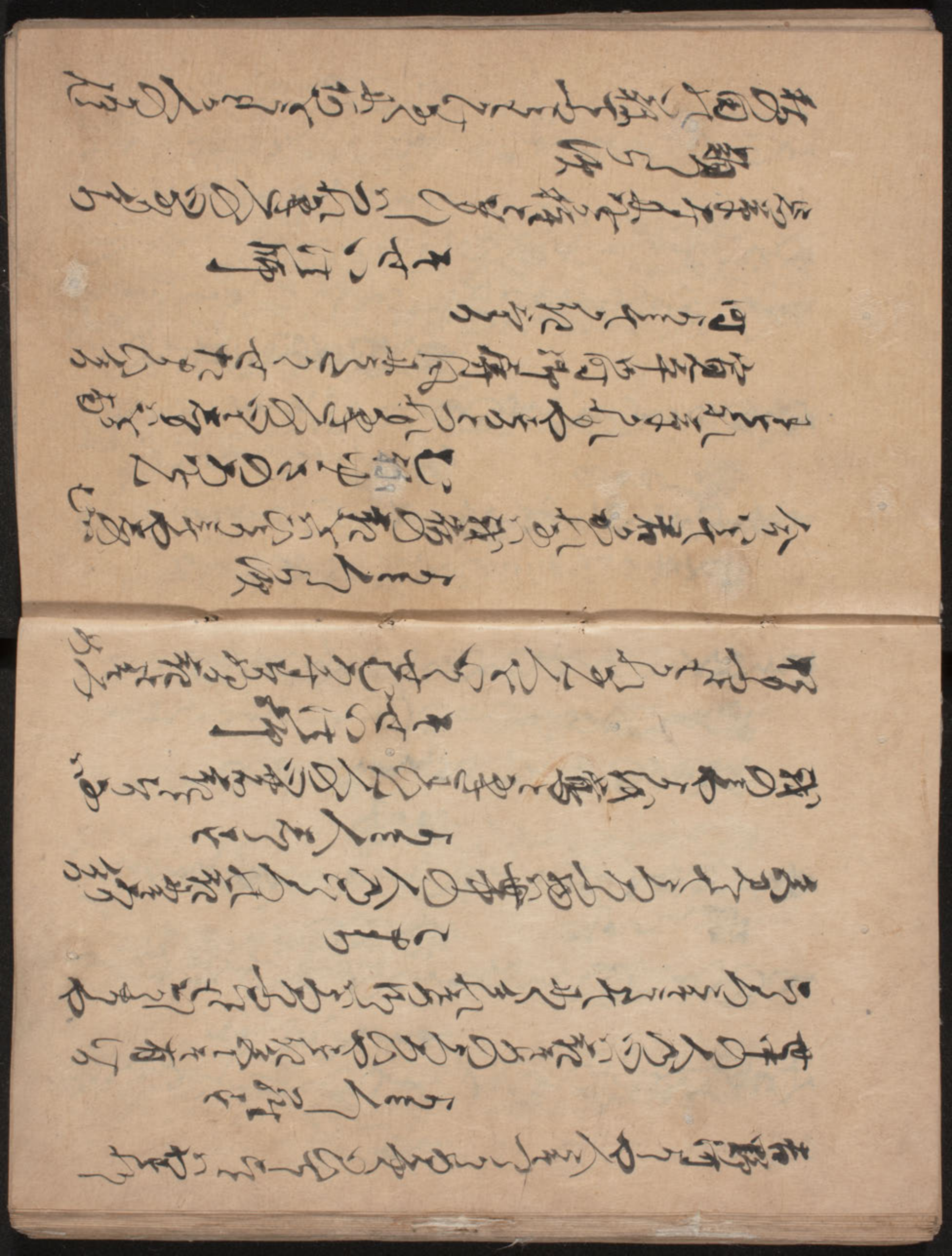
ありしのわれ

ゆふさりはいかなる風のまどはしに
題しらず　　かぞよりの月きよ

玉ぼこのみちはあれどあはぬ
こそのこ

秋風はいかなる人のあはれとぞ
源宗于朝臣





きのはるゆき

[illegible]

[illegible]

[illegible]

曲侍藤原直[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世中

古今和歌集巻第十六

哀傷歌

[illegible]

小野[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そせい法師

宗岳大頼

[illegible]

[illegible]

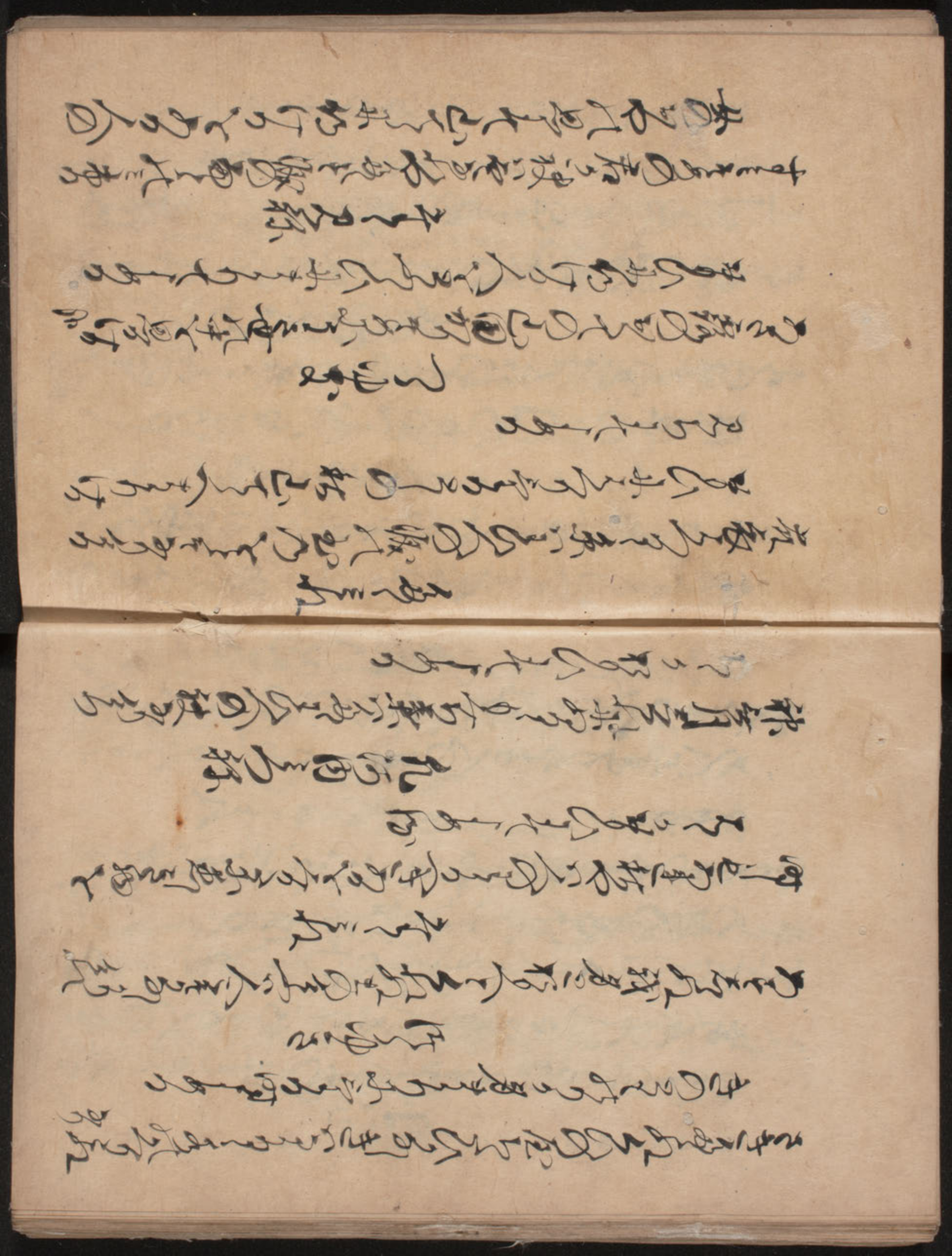
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

諏訪明神の御[illegible]

[illegible]

深草の門の国忘れ日[illegible]

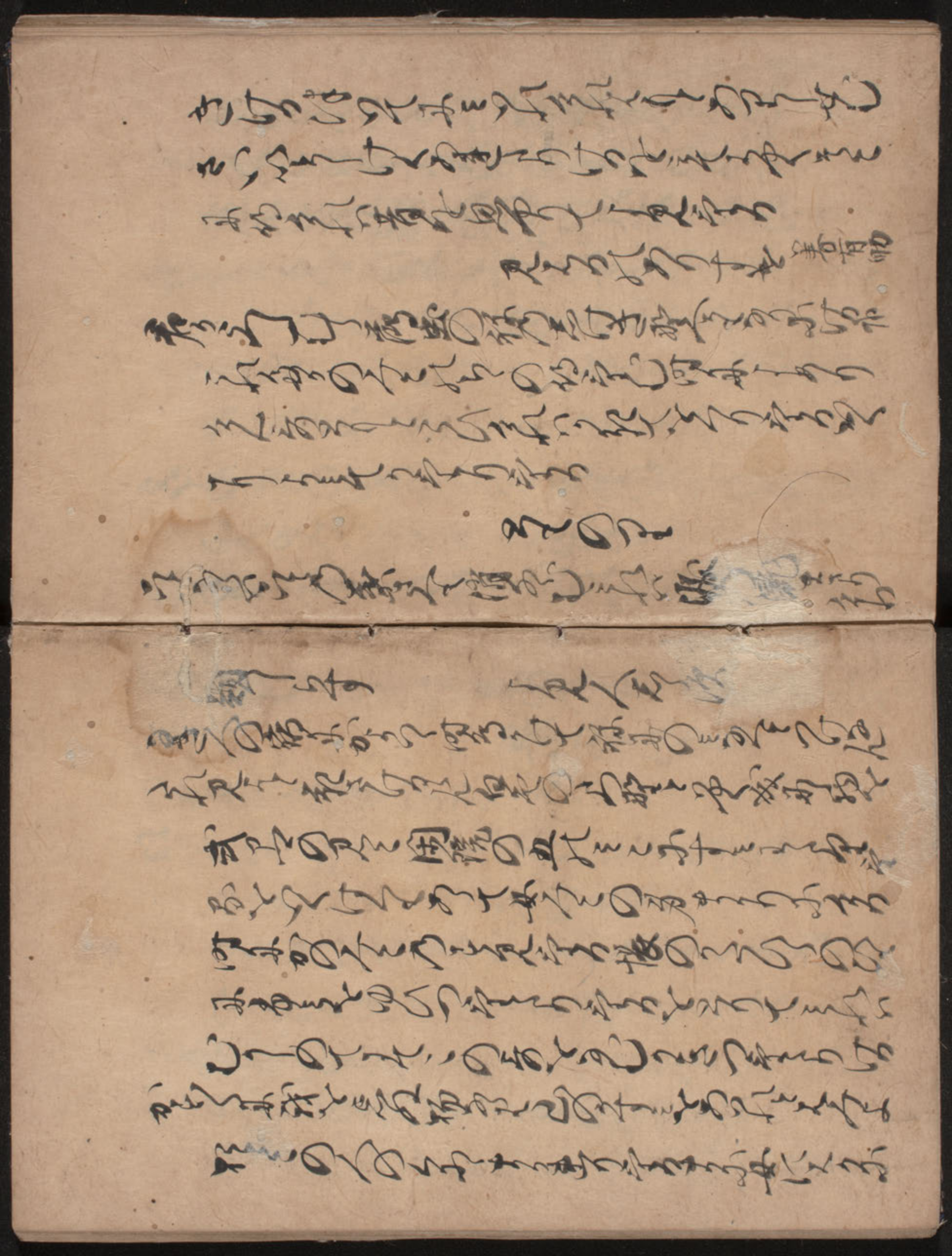
[illegible]

[illegible]

つ[illegible]

[illegible]

[illegible]



やまひをして[illegible]ふる河らをとこ[illegible]
身まさりみけり　よろこ人[illegible]
こゝろをつくしてまろうむ[illegible]家に独居たる[illegible]
やまひおもりて[illegible]
かくなん[illegible]
[illegible]

大はの里

[illegible]
身まさりの人[illegible]
[illegible]

藤原[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]

つゐにおもりたるいろをしかけるをいはしりて
ひのもりあるひまりて物ゝ人[illegible]
まりけるをたちまちに人[illegible]
して[illegible]
まりて世[illegible]
物ゝ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

古今和歌集巻第十七

雜歌上

題しらず　よみ人しらず

我こそは新しけれ　あらたまの　年の内に　春は来にけり

ひさかたの　月の都の　たよりにも　あらぬ我が身　いかなる　ものかは

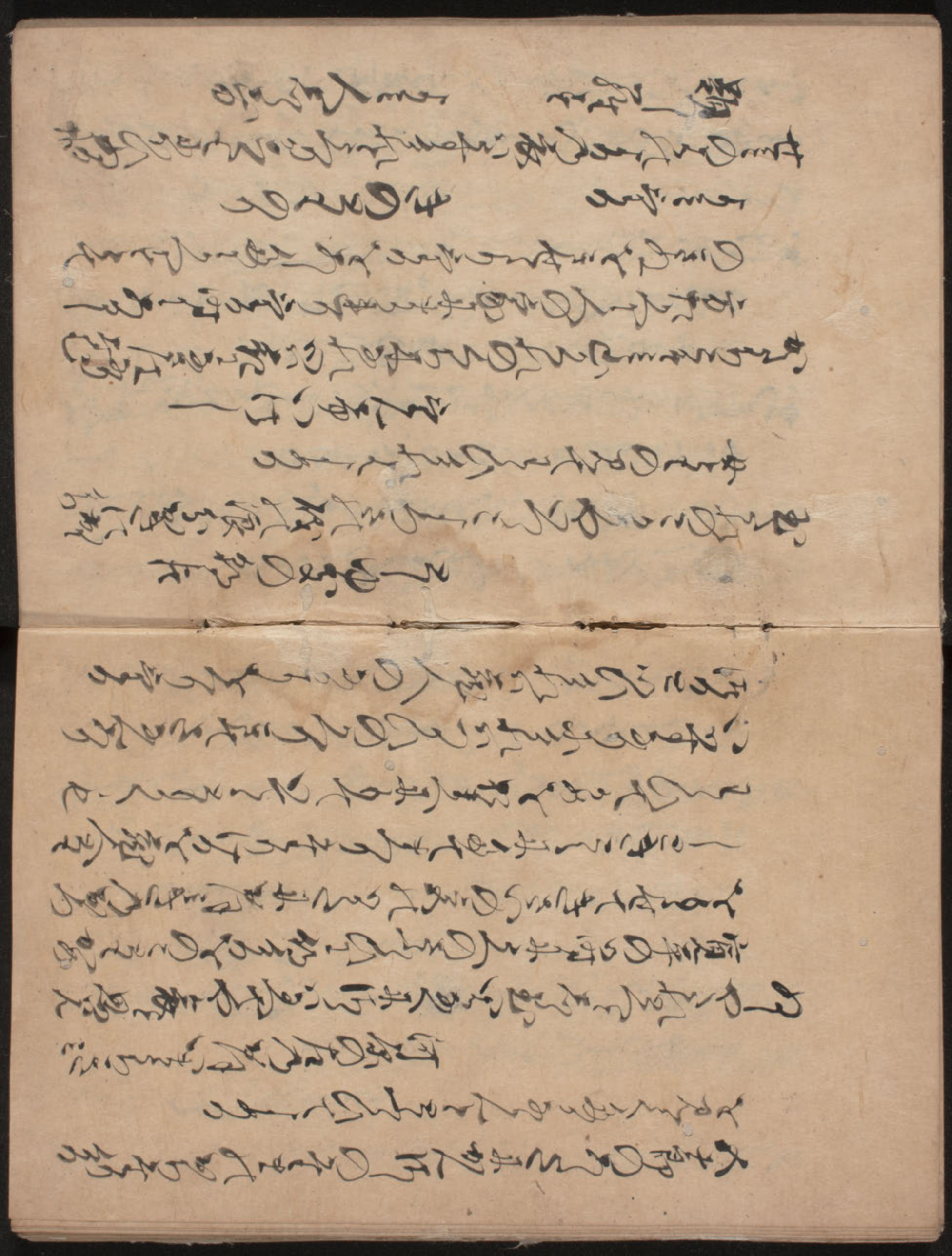
限りなき　君がためにと　思ふ　心は　春の野に出て　若菜摘む

わが衣に　雪は降りつつ　ありけり　問ふ人　思ひ　なきものを

ひさかたの　月の中の　かつらこそ　人の　見てをる　かつらなりけれ

わが　ものと　思へば　やすし　世の　中の　人の　心の　あだ　なりけり

[illegible]

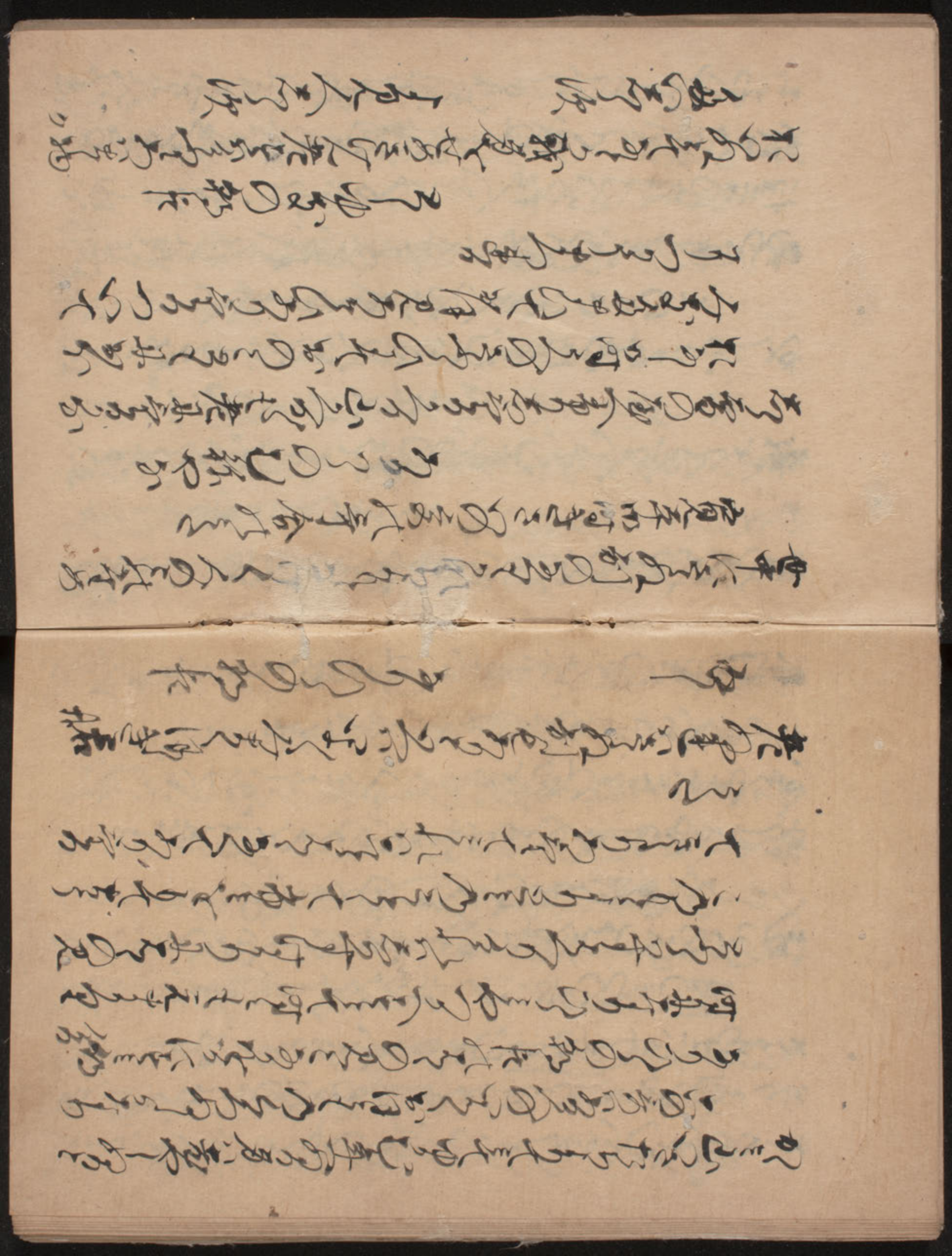


[illegible]

[illegible]

[illegible]

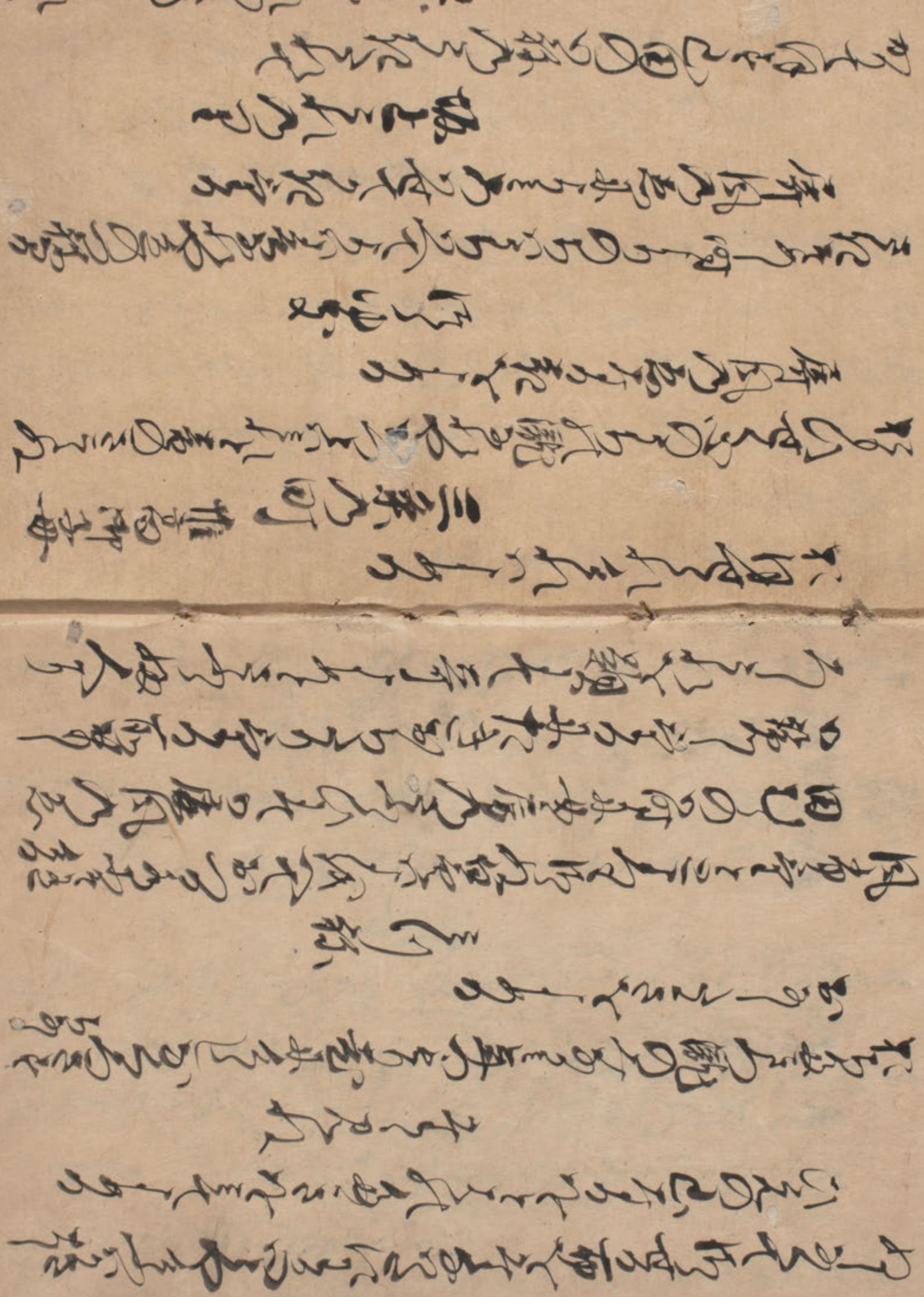
院をうけたまはりけるとそのこゝろをやまに
ぬしあり　あま敬信より氏物語の
ものがたりをうけたまはりけるに
題しらず　よみ人しらず
いにしへのしづのをだまきくりかへしむかしを
ものがたるかな
ものがたりの中に
伊勢物語のこゝろをよめる　よみ人をもし
今こそあまぎれもなきいにしへのしづのをだまき
よの中をうみもだしたるものがたりかな
ものがたりの歌にこゝろをよめる　よみ人
ものがたりの歌をこゝろにかけてよめる
人にいはれぬきのをりはをしまれぬ
かきあつめたるものがたりの物とをもへば
なにはのあしのかれてのちにいとゝをしまれ
みにはなるこのこゝろをよめる
老くのこゝろをよめる
この三ぢのあいだにてあくがれをさそひ
さらぬ世にあるものゝ
こゝろもとゝまるものゝ
こゝろもとゝまるものゝ



[illegible]

[illegible]

[illegible]



古今和歌集巻第十八

雑歌下

題しらず　よみ人しらず

世中いとゆるかなりあまの川こぎ出でぬとも人はしらじな

ゆくへなき空の月をば我ぬしと思ひながらぞ人はうらまぬ

かりそめの旅のわかれと思へども世の常なきぞ悲しかりける

小野小町

たちかへりなほ恋しきはあふことをいかばかりとか思ひそめけん

ひとつ木にすみわびぬれば春ごとに花の咲くこそ悲しかりけり

小野さとき

やこ人のいふをきくにつけ世をはかなみ
文字のやうをひとの見うるものそうまりてあるさ
又かいえのてたるしやこのいやまりをうるを事
ふしあり

小野小町

僧都遍昭ながらへ給ふ頃
題しらず

ながらへしこのよのうちの世をうしと
思ひしらでぞ人はかなしき

世中は長からぬこそうけてあるとはいへ
よのなかにいとゝ我身のありてなかるゝ
心ばへ物のよりきこゝろをたれ世のうれしかりけすとよりそ
なれそうの人こ
ゝろをのくるれあさにをめいすとの世ふを
ゝ
ゝ
ゝ

世中いかりやいかりやとも我身ひとつのあめとなれりる
よの中をいかゝ心へのまゝにあるべきなれのみをしれ
ケちらせる心のあさましきあめをあまれるきゆのうれりみせん
世をぬきいかゝとそもさしられ人ちらせる花のけをあるとも
いかゝあんいかほの中にはとちいかゝ世をうれしてのさこと侍
是月の心のまゝにふるとうれしなの中にあるかひなりは
世中のうをくふるさあめにあらしなにあるゆきあけ
れかゝるとそもうれしさ

ものゝへのうらはれ

よのうれしあるとあるこゝろへあるあるかゝ人こそはさてあり紀

やまのはにつゝまれる

九河内新恒

世にそもそもこゝろあ人心をもて
もの思ひいかゝ河にうきもしら
いまはふるふるひいはんなれなきぬ
題しらず

ちゝ人ちゝ

世をぬきいかゝの業ちゝれ行のうきとはとて考ぬく
不思ちゝとゝにはとあれ行とはなにに我こゝにあり
ある人のいくゝのうちの見これこゝにあり 右は内新恒 恒業
我こゝうれしよのをこゝうをつ人のあめさへあるりうん

たきのうへすうとうれて行方知れずありしの名れ

行くへしらぬの別れをうへてあれそうせしかい

田しなの河みこそ見あらりてけのくふれとあ

ふこうみうりて行方知れぬ人ゆきうて京れ

五原行平朝臣

左近将監にて侍従にうつる

とうせあり方うねを中みうそつつ行方

わまひこそとつれとそ今は我ら人をとそ我たうらふ

行くさこそ行方知らず

平さうあむ

うれ老ゆかとせりうそ見えあるとか我れ

ありそあ命まれ行れうれとうそ

今このあのあちうきみ行ううとつつ行

まうとそうけて行方知らず

やちのきしれ 信材

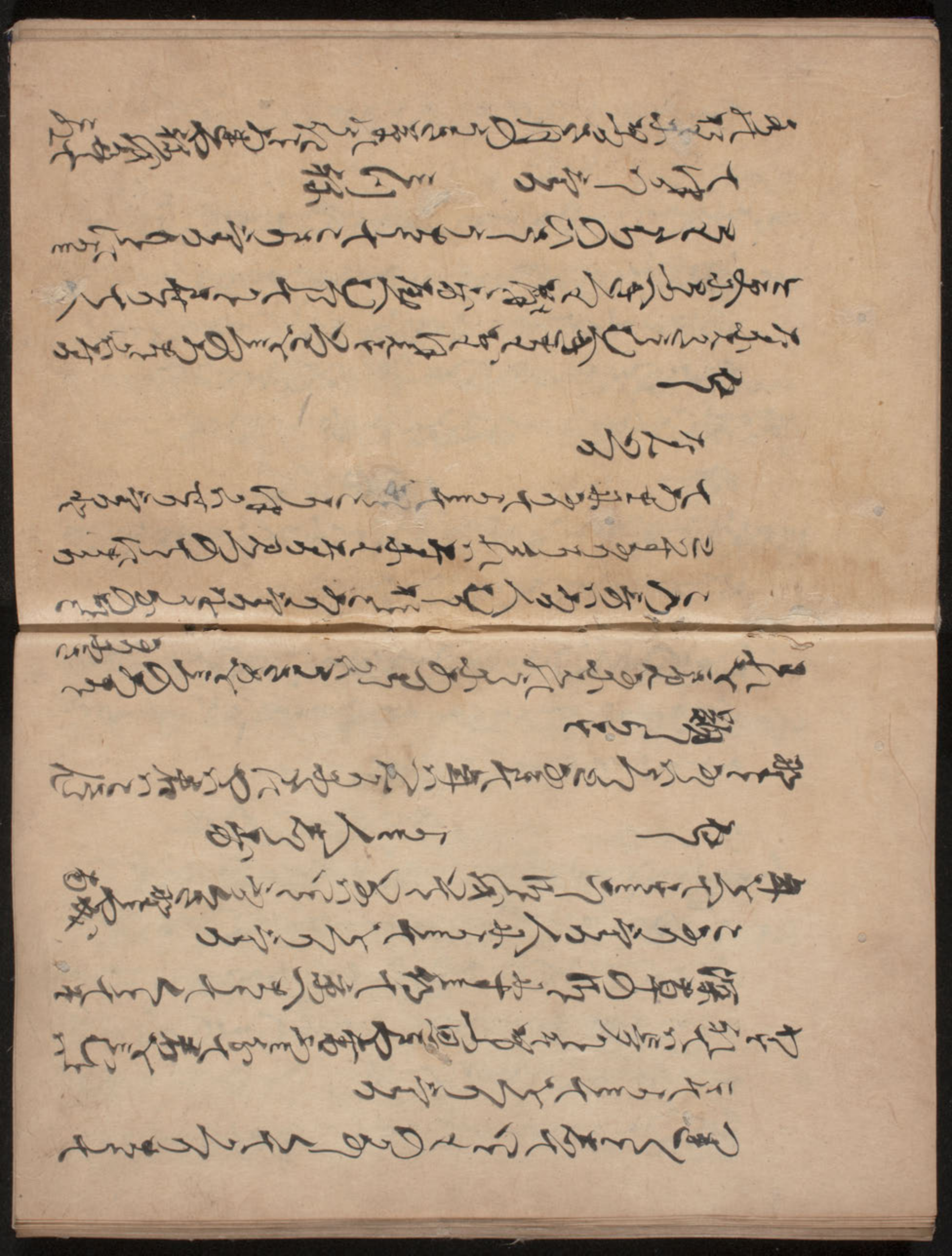
行くあの行方とこそ行

ものうの風 寛平二年佐右中将

河のりをうまのふねにのりてをけく
とはてをうれをけきてをくしろのをきき
こをとはりのひてしあり

清原深養父

ををきをあいををををををれいををををををををををを
かをををををををををを



[illegible]

[illegible]

題しらず　　よみ人しらず

風ふけばおちてかさなる紅葉をばたれかはるばるきてはらはん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第十九

雜躰

短歌

題しらず　よみ人しらず

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七条のさきのうめ

[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

旋頭歌

題しらず

よしの人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

部諧歌

題しらず

[illegible]　素性法師

やまぶきの花さかりなるやどをこそとはぬ人にもみせてまほしけれ

藤原敦忠朝臣

[illegible]

七月六日[illegible]

[illegible]　菅原道真朝臣

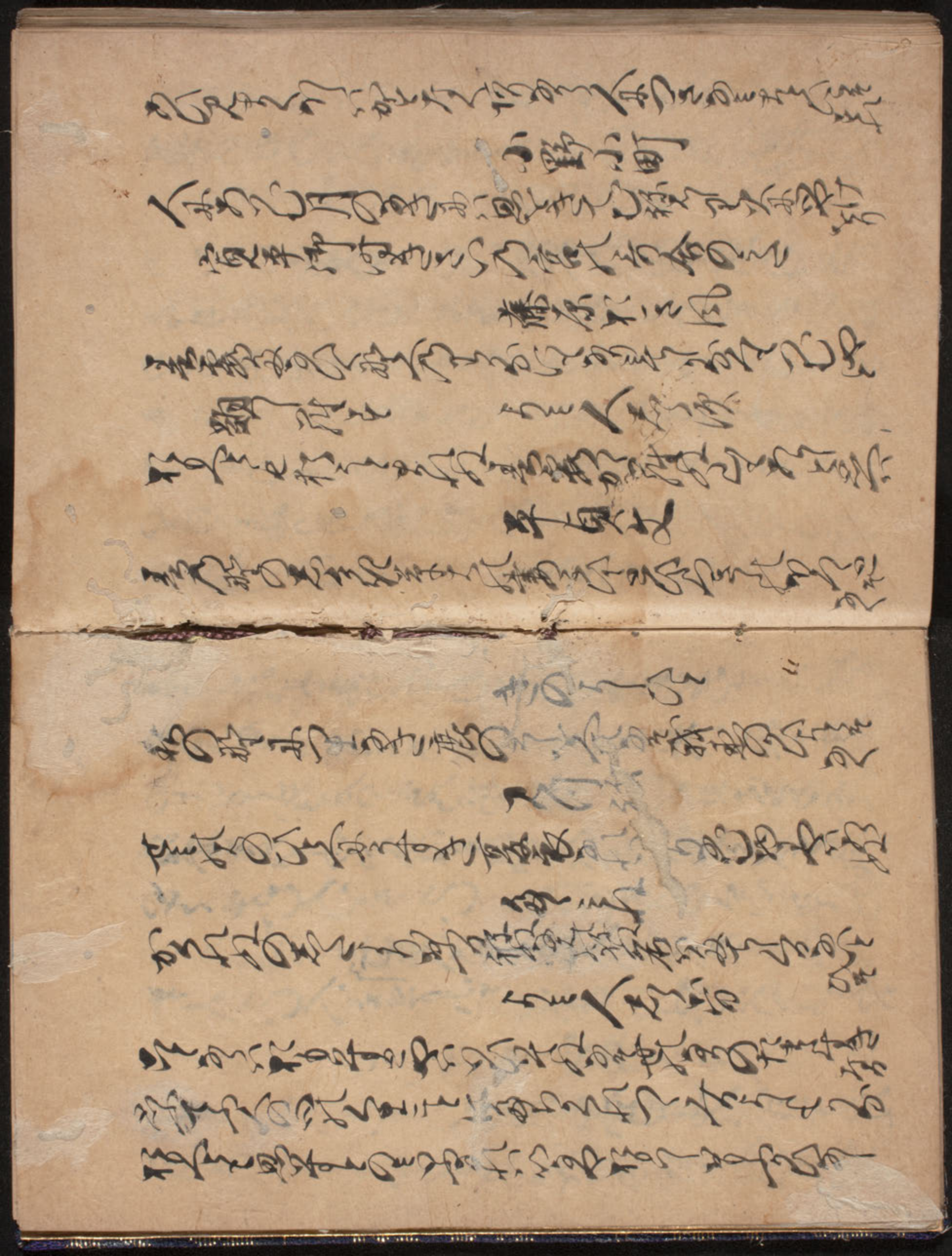
[illegible]　凡河内躬恒

[illegible]　僧正遍昭

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

一本

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なかうの君はなかうの
いとこうりうかたこと
ふよりうへてんのひとれい

くも屋　源氏ものがたり

ようそのうしにてのうち
たまつ屋敷　さぬき　光源氏朝ト女

神きこそとそのをかたもしらてい
きのちうあ

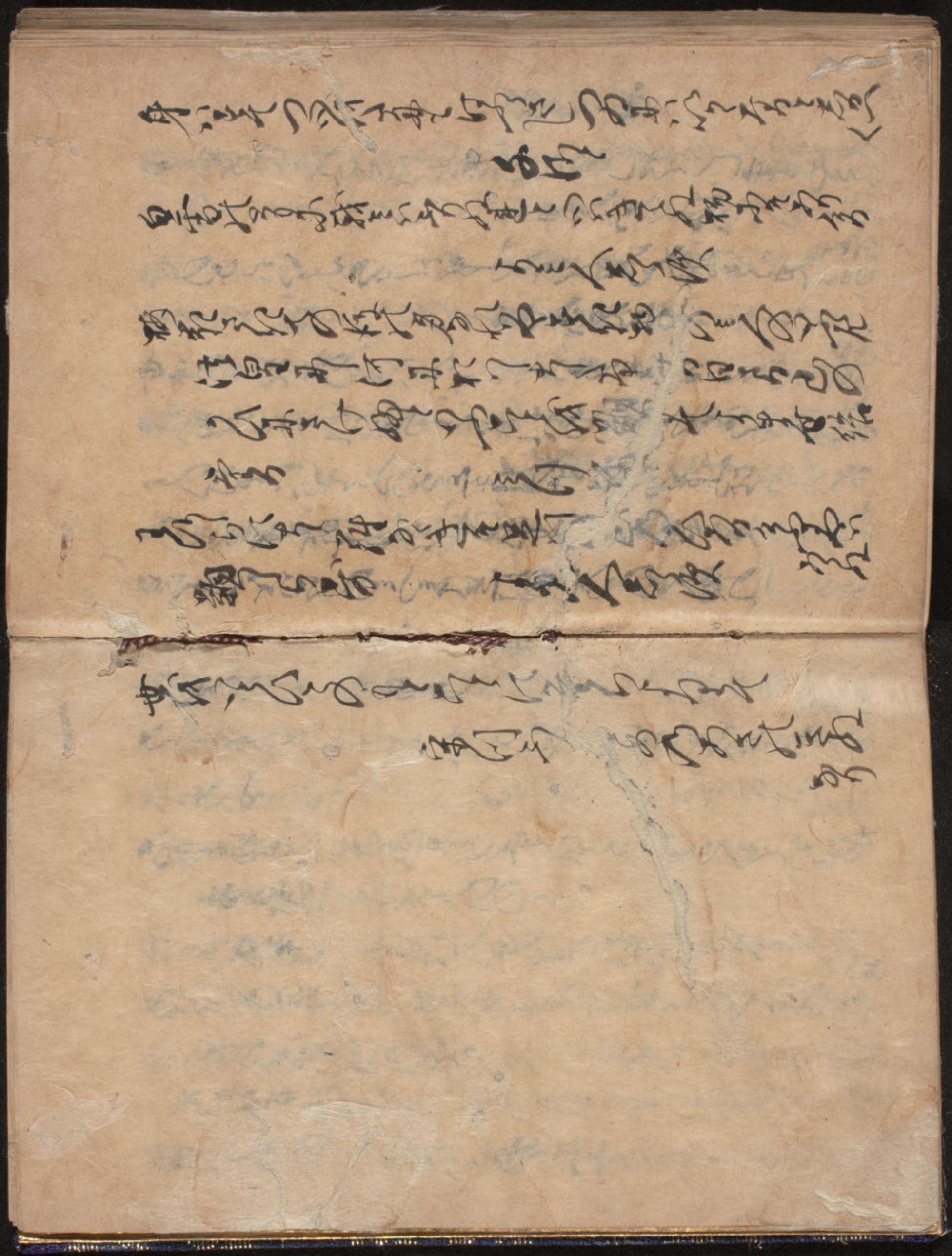
大納言　ゆすくあ

みけきうしうたくはなあ
ものいのこえつうれうう
ちうこん源

ことのこつ月ひとつ
人のうまとりあ
ものまにそくあうこ月
こあれてこれいうもくと
世のうれあにあをあ

左原元光

世のあいふうもくあ
ものうへうあ人ふうあ
ものあ
ものあ人ものあ
あをあ
あをあ



古今和歌集卷第二十

大歌所御哥

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和歌集序

紀淑望

夫和哥者託其根於心地發其花於詞
林者也人之心苗不能無為思慮動遷
感物形焉樂相之發感生於志諭形於言是以
逸者其聲樂怨者其吟悲可以述懷
懷可以發憤動天地感鬼神化人倫和
夫婦真宜於和歌和哥有六義一曰風
二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌是

者為之傳仲秋鐘之吟樹上雖無曲
折各發歌謠物響皆有自然之理也然
而彼代七代時質文人淳情欲無分和哥
未作遠乎素戔嗚尊到出雲國始
有三十一字之詠今反哥之作也其歌
雖天彼之海童之女莫不以和歌通
情者爰及人代此風大興長歌短歌旋
頭混本之類雖殊非一源流漸繁猶

神雲之術生苗之煙海天之波起於一
滴之露至如雞波清之什獻天皇留
清河之芳蘭報　太子或事閑裝思
興入為玄但見上古寄多存古儒之
詩未為耳目之玩徒為教誡之端古
天子每夏展美景詔侍臣預宴遣
者獻和歌者臣之情由斯可見四貴
恩之性於己有分所以隨民之願擇士
之芳也自大津宮之初作詩賦詞人
文子慕風流塵移彼漢家之字化我
日域之俗民業一改和歌漸衰然猶
有先師柿本大夫大夫者高振神功
之思獨步古今之間有山邊赤人者
並和歌之仙也其餘業和歌者絶而
及彼時寄及流滿人貴大者遥浮詞雲
興艶流白永涌其實皆落其華孤榮

至有好色之家以此為花鳥之使允食之
客以此為活計之謀故手為婦人之右
難進丈夫之前代古風者僅二三
人然長短不同論以可辯就山僧西
七得歌神然其詞華而甘質如品畫
好妙徒動人情其原中將之歌其情有
餘其詞不出乎養花雖甘紋色而有意
香文珠巧語物然其神近佑如買人之

著新衣字字山僧擺書其詞就解而首
尾停滯如秋月過眼若小聖小町之
新若衣通姬之流也然艷而乏氣力如
病婦之著新衣雖大伴黑主等古稿丸
大夫之次也頗有遠世而神其鄙如田
夫之息花而也此外氏姓流傳者不等
勝數其大底皆以艷為本不知和歌
趣者之作人之手書中然未利不用諫和歌

恐哉〻〻非貴為將相而餘金錢而
胥未腐於古中存右先滅於世上適為
後世後知者性和歌之人而已何者詔
進人耳義憎神明也昔平城天子詔
侍臣令撰万葉集乃奈以来將歷
十代數過百年其後和歌亦不被採用
雖風流如業平寧相輕情必在納言而皆
以他文同不以新道頻　陛下御宇于今

九載仁流海洋洲之外惠澤飛波山之陰
閑寂為[illegible]之聲穿[illegible]之間口砂長為嚴
之頃洋〻滿耳思絶說絶之風欲興之癖
之道義詔大內記紀友則御書所預紀
貫之前甲斐守凡河內躬恒右衛門府生
壬生忠岑六名歌家集并古來舊歌
曰續万葉集於是重有詔部類所奉之
歌勒為廿卷名曰古今和歌集臣等詞

廿春花之艶石竈秋夜之長況乎進恐時俗之嘲退慙古執之拙適遇和歌之中興以樂吾道之再昌憐呼人磨既没和歌不立斯哉可時延書五年歲次乙丑四月十五日医員之寄識

序

此集家之所稱雖說之多且任師說又加了見為備後世之證者不顧老眼之不堪手自書之

近代僻案之好古書中之失錯稱有識之秘事可謂道之魔姓不可用之但少此用捨只可隨手身之所好不可有他之施之義剞志同者可隨之

貞應二年七月廿二日 美敦

同廿八日今讀合筑書入唐文字
傳子孫可為將來之證也

戶部尚書藤判

飛鳥井亜槐敬雅卿真蹟
古今和寺集全部一冊小四半本
者稀也珍重可愛翫矣

明治五年冬

古筆了仲

A

132X
105
1